
† 路地裏の風使い † stray cry baby.

しまこ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十路地裏の風使い + s t r a y c r y b a b y .

【ZPDF】

Z9212Z

【作者名】

しまこ

【あらすじ】

孤立した街にやつてきた、ひとりぼっちの幼い少女と、孤立した塔に住む風使いの少年のお話。

01 (前書き)

メルマガで現在配信中のお話です。

青のキャンバスに、連なる白パン。

フワフワとやわらかそうなその白パンの表面に、何を塗つたら一番おいしいだらう。

蓋を開ければつやつやきらきら、甘い香りの広がるイチゴジャム？

透明な瓶に光を集め、琥珀色の輝き放つ蜜林檎？

ほんのり赤く染まつたほっぺみたいなモモのジャム、お田様の友達アプリコット、タケブルーベリー。野花の香り集めた欲張り蜂蜜。とろけるバターにつぶつぶマスター、酸っぱい刺激。ピクルスのせて、生ハムのせて、生みたて卵を茹でてはさんでシャキシャキレタスもおいしそう。

好きなものだけ重ねていつたら、一体どれくらいの重さになるだらう？

風に身をまかせ、流れていく雲を眺めていたら、ちいさなふりにおなかが鳴つて、コウイは草原に寝転がつたままがっくりと肩を落とした。

「……おなかがすいていたら、いくせはできなこものなの……」

栗色の前髪が、草花と一緒にそよそよと風になびいてくる。甘い花の香りが鼻先をくすぐった。

この風が、香りだけでなく食料を運んできてくれたら、どんなに喜ばしいことか。

コウイは、目前から手の届かぬ遠くへと流れしていく白パンを田で追いかがり、どこまでも続く青い空を見ていた。

わたしはママがきらいだし
ママはわたしがきらいです
けれどわたしは気にしません
なぜってわたしもママがきらこだから
これっておたがいとまでじょっつ。

だからわたしは今田も一田
ママのことをあくまであります

ぐるしくても かなしくても
さみしくなつて なみだがでても

このままずっと
ひとりぼっちでも

+

早起きをして、元気よく外へ飛び出やつ。
特に、こんな風に時折優しい風が吹く日は。
「いつまで寝てるのコウイーーー！」いつまでたつてもおふとんが干せ
ないじゃないーーー！」

街の真ん中一軒家。今日もワーナーさんのマーガレット奥さん

が、舞台女優顔負けの張りのある声で叫んでいる。

相手はおそらく一人娘さん。

名前はユウイ。

一か月前にこの街へやつてきた、小さな女の子。この朝のやり取り。彼女達が一人でこの街に住み始めてから毎朝の日課で、慣れてしまつた街の住人さん達の中に、特に文句を言う人もいなかつた。

……今朝たまたまワーナー家の前を通り掛かつた野良犬は、驚いて逃げていつたけど。

美声の持ち主マー・ガレットは、ふとんにくるまり芋虫のようになつて動かないユウイをふとんごと抱え、勢いよく窓の外へと放り投げた。もちろん、ふとんの両端はしつかりと掴んで、だ。

ごりごり、と華麗に一回転して表に放り出された羽化前のユウイは、べしゃり、と優雅に着地して草原に寝転んだ。何しろ羽化前だつたので、どんなに素敵に着地してみせても、どろどろの中身はなかなか起き上がる出来ない様子だつた。

「いーーい？ 今日もお夕飯まで帰つて来ちゃ 駄目だからね！ お友達が出来るまでおうちに入れません！ 分かつてると思うけど！」
ぴしやり、と窓のしまる音。何ごとも無かつたかのように、街の人々がユウイの前を通り過ぎて行く。それはきっと、もう慣れっこだから。いつも通りの朝が始まつた、と。

物陰から様子をうかがつっていた野良犬が、もつそりとユウイに近付いて匂いを嗅ぎ始めた。どろどろのユウイは地面に顔を付けたまま「ほつといてちょうどだい！！」と野良犬を一喝する。それでも野良犬は、よほどおなかが空いているのかなんなのか。立ち去らずユウイの匂いを嗅ぎ続けていた。

地面に伏せたままのユウイがのろのろむくりと顔だけを起こし、野良犬と顔を見合わせると、目が合つた瞬間野良犬の動きがぴたりと止まり、それから尻尾を丸めて走り去つてしまつた。

「デリカシない犬なのね！！」

ユウイは涙と鼻水を地面に落としながら、もう姿の見えない野良犬に向かつて肩をいからせ、涙声でそう叫んだ。たまたまそこを通りかかつた杖つくおじいさんが、そんなユウイの姿を見て驚いていた。

ユウイはポケットを探ると、取り出したティッシュでりんごがくしゃみするみたいに鼻をかみ、顔の中心を真っ赤にさせながら、さて、これからどうしようかと不器用に腕を組んで考え始めた。どうにかしておうちに入りたいご様子で、文字通り頭をひねり、足も交差させ、全身を使って考え始めた。そしてどんどん体が斜めになつていくなか、ユウイの頭の中で豆電球がパッと光つた。

今日はとつてもいいお天気。

ユウイはマー・ガレットがおふとんを干すと言つていたのを思いだし、それなら、いつもおふとんを干す時に開け放しているおうちの裏の窓から入るうと、一件先の杖つくおじいさんとそのお隣りのお菓子屋さんの間を抜けて裏へ回り、急いで駆け出していった。

真っ赤なお鼻の駆け足ユウイは、息を切らせ、体を斜めにしながら細い裏道を通り抜けて行く。途中、おそらく杖つくおじいさんちのものであろう大きなブリキの蓋つきバケツを見つけ、それを両手で引きずりながら、やつとのことでおうちの裏へとたどり着いた。

予想通り、窓はおふとんを干すために開け放たれ、さらに都合の良い事にマー・ガレットの姿はそこに無かつた。

鼻たれユウイはキラキラとそのキャラメル色の瞳を輝かせながらブリキのバケツを窓の下まで運び、その上によじ登つて部屋の中への侵入を試みた。

と、その時、田の前が突然真っ暗になり、何かやわらかい感触に押し出されるようにして地面に投げ出されてしまった。

ぐらぐらかちか。ユウイの頭上をお星様が舞う。

そこに、昔話に出て来る女王様のよつな声が降つて来て、ユウイの頭上のお星様が弾けた。

「一階じゃないのが幸いね」

頭をぶんぶん振りかぶり、声のする方を見上げれば、まるでコウイを馬鹿にするかのように窓が真っ白なおふとの舌をぐりと覗かせていた。

「あんたの考える事なんてお見通し。わあ、わざわざ出掛けなさい。今日は始まつたばかりなんだから」

女王マーガレットは、窓から飛び出す舌の上に頬づえをつき、ふとんたきの杖を持つてコウイを見下ろしている。

そのままママなんか窓の口に飲み込まれちゃえればいいんだと、コウイはひつくり返つたまま目一杯頬を膨らませ思つた。

+

その後も何度もおうちの中への侵入を試みたコウイだったが、女王様の防御率はとてもなく高く、断念せざるを得なかつた。

コウイはブリキのバケツを引きずりながら、とぼとぼと裏道を引き返した。バケツを拾つた場所まで戻ると、足下に一匹のナメクジが這つているのを見つけた。

「あなたもおうちがないのね、かたつむりさん」

コウイはきょろきょろとあたりを見渡し、小さな空き瓶を見つけると、「これでひとあんしん」とそれをナメクジの上にかぶせた。

それからしばらくなメクジ観察をしていたコウイは、自分もブリキのバケツを逆さまにしてかぶり始めた。すっぽりと自分の体が収まって、暗闇が思いのほか心地よかつたのと、ここに隠れていれば誰にも見つからないだろうと考へ、コウイは今日一日の中にいうと決めた。

（おうさまがいれば、きっとたすけてくれるのよ）

コウイは暗闇の中で「おつさま」の事を考えていた。いつも自分には甘かった「おつさま」。女王マーガレットの夫であり、自分の父であるクレス。気弱な彼はいつもマーガレットの尻に敷かれていたので、王様といつよりは召使に近かったのかもしれないが、コウイにはいつも優しくて、コウイがマーガレットに叱られている時はいつも助けに来てくれたのだった。

（にしのもり、かえりたいなあ。おばあちゃん、げんきかなあ）
小さくため息をつくと、一緒に涙もこぼれ落ちそうになつた。

今から一か月前のこと。

突然、コウイと祖母が一人きりで暮らしているところへ、一年前に父と離婚したきり会つていなかつた母、マーガレットが「迎えに来た」とだけ言い、コウイと荷物を抱え西の森の父の実家からコウイを連れ出した。一緒に住んでいた祖母は目を丸くしておろおろとしていたし、コウイも何が起きているのか理解できなかつた。父はもう何か月も前から家にはたまに帰つて来る程度で、最近ではまったくといつていいほど顔を見せなくなつていたし、その日も不在だつた。

「パパは？ おばあちゃんはいつしょじやあないの？」

マーガレットは無言で振り返り、祖母に一度だけ深く頭を下げた。
ああ、おばあちゃんは一緒じゃあないのね、と、それだけは理解する事ができた。

それから数日かけて、コウイとマーガレットはこの街、ベーグルノーズにやつて來た。訊けば、マーガレットの生まれ故郷だという。「今日からここでママと二人で暮らすの。いい？ これからは何でも一人で出来るようになりなさい。甘つたれは許しません」

街に着いて一日前の朝。そう言つてマーガレットは仕事に出掛け行つた。西の森を出て数日経つても、コウイには何が起きているのか分からなかつた。とりあえずおながが鳴つたので、台所を覗いてみる。自分で朝食の準備をするのは初めてだったので、目玉焼き

の黄身はぐしゃぐしゃだつたし、それを独りで食べる自分の顔も同じだつた。

気晴らしに外へ出てみようか。外はいいお天氣。けれどおうちから一歩出てみれば、道行く人々の誰もがユウイを知らなかつたし、ユウイも誰も知らなかつた。街に出るとよけいにひとりぼっちが強調されているように感じた。

それでも勇氣を出して、自分と同じ年頃の子たちに話しかけてみる。

「めんじくさいこ」

「へんなこ」

と言われ、馬鹿にされるようになつた。緊張のせいか、自分の言いたい事が伝わらない事が多かつた。そのせいだらう。人と話す事は決して嫌いな事ではなかつた。そのはずなのに。

ふとんの中に逃げ込む日々が続いた。

一週間、一週間、一ヶ月経つても、マーガレットは父や祖母について何も話してはくれなかつた。ただ、父について一言「勝手な人」と言つただけだつた。

何故か世間話は飽きるほど聞かせてくれるのに。一番訊きたい話は訊いてはいけないという暗黙のルールが自然に出来ていた。

そうして一ヶ月が過ぎ、ユウイはおふとん王国から追い出されるようになり、こうして街を彷徨う日々が続いている。

バケツの中で大きく溜め息をつくと、ぼこん、という音が頭の上で響いた。ユウイは驚きバケツをほんの少しだけ持ち上げて外の様子をうかがう。すると足下に黒い影が現れ、ユウイの靴をぱりぱりと引っ搔き始めた。それに驚いたユウイがバケツをさらに持ち上げようとするが、さらにぼこん、ぼこんと音がして、どんどんバケツが重くなり持ち上がりなくなつていつた。ユウイは焦りバケツの中で「だして！？ だして！？」と何度も叫んだが、バケツは重くなる一方だつた。

不気味な物音が怖くなつてきたユウイは、バケツの底を力一杯押

し上げた。そうして出来た隙間から這い出るよつに脱出すると、今度はお尻を何かに引っ搔かれた。振り返ると、真っ黒な子猫がユウイのお尻に威嚇している。脱出したバケツの上には大きなぶち猫が一匹、我が物顔で乗つかつていた。

ユウイはなるべく猫を刺激しないようゆつくりとその場を離れようとした。けれどユウイのそんな気持ちもお構いなしに、子猫がユウイに突撃してくる。ぱりぱりとそこらじゅうを引っ搔かれ、ユウイは泣きながら裏道を駆け抜けた。

息を切らせ街の大通りに出たユウイは、背後を確認し、さらに全身をぱたぱたと叩きその場で一回転して子猫がついて来ていないかを確認する。そうして子猫がいない事がわかると、ほっと息を吐いて鼻をすすつた。

「ねこさんこわい……こねこさんなのにこわい……」

せつからく見つけた安息の地を追われ、ユウイは仕方なく大通りをとぼとぼ歩き始めた。なるべく行き交う人々の目に止まらぬよう歩道の隅を早足で歩いた。ただ街を歩いているだけなのに、冷や汗が背中をつたう。何故何もしていらないのに、悪い事をしているような気分になるのだろうか。

大通りの一角で足を止め、辺りを見渡し、建物と建物のあいだにわずかな隙間を見つけると、ユウイはその隙間に隠れ今朝自分と一緒に追い出されたお気に入りのクマのポシェットを「こそこそと探り始めた。中にはハンカチとティッシュに、飴が三つと、銀貨が一枚。銀貨に覚えがなかつたので、おそらくマーガレットが入れたのだろうとユウイは思った。お夕飯まで帰つて来るなどいうことなので、お昼ご飯を買うお金だつ。

ポシェットの中を確認していると、どこからともなく流れてくる甘く香ばしい匂いがユウイの鼻先をくすぐつた。ぐぐう、とおなかが苦しそうな声を上げて、ユウイに訴えかけてくる。近くの雑貨屋さんを覗いてみれば、店の時計は十一時を指していた。

「もうおひる」はなんのね……。おひる」はん、たべてからおいだ

さればよかつたわ……」

甘い香りに誘われて、コウイは匂いのする方へとふらふら歩き始めた。早く！ 早く！ と急かすようにおなかの虫が鳴いている。自然と早足になつて、気がつけば大通りの中ほどにある一件の店の前に来ていた。

店の前で立ち止まつたコウイは、店の看板を確認すると唇を尖らせた。看板には“喫茶カルペ・ディエム”と描かれている。だがここが喫茶店ではない事をコウイは知つていた。

背伸びをして、コウイはショウウインドウを覗いてみると、そこにはおいしそうな白パンやクロワッサン、木の実の詰まつたパンやサンドイッチがすらりと並べられていた。コウイがさらに店の奥を覗き込もうとショウウインドウの前でぴょんぴょん跳ねてみると、奥には色とりどりのジャムや蜂蜜、ドライフルーツ等が見え、そしてその横のレジには白髪のおじいさんが立つてゐるのが見えた。

（きょうは、くろいあたまのこ、いないわ）

コウイはほつとため息を吐き、その場にしゃがみ込んだ。おうちを追い出されるよつになつてから、コウイは何度かこの店の前まで来た事があった。看板は喫茶店でも、この店はパン屋さん。いつも店の前には良い香りが漂つていて、コウイのおなかを刺激する。けれどコウイはいつもこの店に入る事が出来なかつた。店の奥を覗くといつもそこには、さつきコウイを追いかけてきた黒猫のような黒い髪の少年がいて、まるで威嚇するかのようにレジの前に座つてゐるからだ。実際あの猫のように引っ搔かれた事などは一度もなかつたが、大人から子供まで威圧する空気を放ちレジを打つ少年の姿は、コウイにとつて脅威だつた。見でいるだけで怖いのだ。

その少年が、今日はいない。コウイはもう一度確認のため店の中を覗き込んだ。やはりレジの前にいるのは白髪のおじいさんだつた。

（きょうなら、おかいもの、できるかな？）

店の中をきょろきょろ覗いてみると、コウイは何やら店の真ん中に小さな塔のようなものがあるのを見つけた。目を凝らしてよく見

ると、それはショークリームでできた塔だつた。

（なんだろう、あれ……たべられるのかしら？）

もつとよく見えないものかと、ユウイはつま先立ちになり、バランスを崩してショウウインンドウにへばりついた。ショークリームの塔の向こう側にいる白髭のおじいさんと田が合つた。

のんびりレジを打つていたおじいさんは、田をぱちくりとさせ、絵本に出てくるサンタクロースのようなふわふわの髭を確認するよに撫で付け、ユウイを見つめた。店の客も、おじいさんにつられるようにユウイを見ていた。自分に注目が集まっているのを感じたユウイは、顔を真っ赤にしてその場を走り去ろうとしたが、ユウイがお店の扉の前を通り過ぎようとしたところで扉が開き、運悪くそれに激突するはめになつた。

扉の前で頭上にお星様をきらめかせていると、田の前に、自分とそう歳の変わらぬ少女が眉をひそめて立つていた。ユウイは慌てて立ち上がり、その場から逃げるよう走り出した。

大通りを全力で走つていると、途中で何度もさつきの少女の表情を思いだし、ぽろぽろと涙がこぼれ落ちそうになつた。お店のお客さんもあのおじいさんも、きつと今ごろ自分を笑つてゐる。そんな気がして、ユウイはお店が見えなくなつても走り続けた。待ちを行き交う人々も、自分を見て笑つてゐるに違ひない。そう思うと顔を上げる事が出来なかつた。見えない何かに追われてゐるような恐怖に耐えきれず、気がつけばユウイは人気のない路地裏へと向かい駆け出していた。

路地は迷路のように入り組んでいる。だから路地裏の奥に入ると一人で帰つてこれないよと、ユウイはマーガレットに言われた事があつた。けれど今はそんな事はどうでもよかつた。ただただ恥ずかしくて悲しくて、人のいないとこへと逃げたかつた。

大通りをだいぶ離れたところで、ユウイは古い商店の崩れた壁につまづき、転んだ。転んだ拍子に涙がぽろりとこぼれ落ちて、それまで我慢していた辛い事や悲しい事がすべて溢れ出しそうになつた。

うつぶせのまま倒れていると、何かがユウイの頭をつついた。ユウイが顔を上げると、そこには、今朝おうちの周りをうろついていたあの野良犬がいた。

野良犬がユウイの匂いを嗅ぎ、頬を舐めた。なぐさめてくれるのかしらとユウイは思った。ユウイが野良犬の頭を撫でると、野良犬はユウイのお腹に顔をうずめてまた匂いを嗅ぎ始めた。

と、次の瞬間。

野良犬が何かに追われるよう走り出した。するりと何かがすり抜けて行く。えつ？ とユウイは走り去る野良犬の後ろ姿を見つめた。そして自分の体のあちこちを叩いて確認する。

「……ポシェット！ ！」

お気に入りのクマのポシェットがない！ ユウイは慌てて野良犬を追いかけようとしたが、すでにその姿は見えなくなっていた。

入り組んだ路地に一人、ユウイは取り残されてしまった。

+

野良犬を探し出すため、しばらく周辺を行ったり来たりしていたユウイは、気がつけば路地裏に飲み込まれていくように奥へ奥へと足を踏み入れていった。今まで何度も何度か人目を避けるために路地裏に入った事はあつたが、こんなに奥まで入り込んだのは初めてだつた。薄暗く人気のない路地は少し無気味だつたし、なによりマーガレットが「路地裏の奥へは危険だから絶対に行かない事」と言つていたからだ。

奥へと進んでいくうちに、ユウイはマーガレットが危険だと言つていた意味を、身をもって理解していた。古びた建物は今にも崩れ

落ちそうだったし、すでに崩れた煉瓦はそこらに転がっているし、潰れたお店のショウウインンドウは割れて、ガラスが散乱している。ユウイは次第に怖くなり、引き返したくなつたけれど、持つていかれたクマのポシェットがどうしてもあきらめられなかつた。歩きながら、ユウイはマー・ガレットやクレスと暮らしていた時の事や、西の森のおばあちゃんの事を思い出していた。みんな一緒に仲のよかつた頃、あのクマのポシェットも、いつも一緒にいた。物心つく頃には、すでにクマのポシェットはユウイの元にいた。本当に、いつも一緒にいたのだ。

見つかるまで、泣かない。またこぼれ落ちそうになつた涙を袖で拭つて、ユウイは歩き続けた。途中何度も崩れた煉瓦に足を取られ転んだので、スカートは泥だらけだつたし、足は傷だらけだつた。おなかも空いていた。いつの間にか街からずいぶん離れた場所に来ていたようだつたが、頭の中はポシェットでいっぱいだつたので、ユウイはそのままどんどん奥へと進んでいつた。それに、このまま歩き続けていれば、ずっと一人でいられるような気がした。

そんな事を考えていたその時、どこかで、ガシャ、という物音がした。

ユウイは身をこわばらせ足を止めたが、すぐに氣のせいだつとうと考へ、再び歩き始めた。

が、今度はユウイのすぐ近くでガシャリ、という音が聞こえた。
(だれかいる……！)

ユウイは崩れかけた壁にへばりつき、しゃがみこんだ。こんなところに誰か来るなんて思つていなかつたので、すぐにあの野良犬ではないかと考へた。おそるおそる壁から顔を覗かせてみる。けれど、そこにあるのは瓦礫やガラス、壊れたバケツや折れたパイプばかりで、生き物の気配なんてどこにも無かつた。

氣のせい、そう考へ深い溜息をつくと、ユウイは足下に何やら長い影が伸びているのに気付いた。ユウイがその影が移動して行くのを目で追うと、その先に人影のようなものが見えた。それは、背中

から何本も腕が生えていて、歩くたびにその手がまるでおいでおりでをしているように揺れていた。

ユウイはその影がいなくなるのを、田を閉じ息をひそめて待ち続けた。しばらくしてから薄田を開けて影がいなくなつたのを確認すると、一田散にその場から逃げ出した。細い路地を駆け抜けると、何故か先ほど通つた道とは違う道に出でてしまった。慌てて来た道を引き返すと、また見たことのない道に出でてしまった。

ユウイの顔がどんどん青ざめる。

路地を行つたり来たりすればするほど、知らない道に出でしまう。ユウイは何度か行き来を繰返したところで、自分が道に迷つた事を知つた。薄暗い路地の真ん中で、途方に暮れて座り込む。急に足の擦り傷が痛んだ。

ガシャリ、と、またあの音が聞こえてきた。ユウイはその音から逃げようと、よろよろ歩き始めた。少し歩いたところで、いつもの大通りが見えた気がして走り出した。あんなにひとりぼっちがよかつたのに、今は誰かに会いたくて仕方がなかつた。

路地を懸命に走り抜けたユウイは、目の前の光景に愕然とした。迷路のように入り組んだ路地を抜けて現れたのは、いくつにも連なる古びた屋敷の群れだつた。どの屋敷も朽ちていて、とても人が住んでいいるようには見えない。どこからどうみても廃墟だつた。

ユウイの頭に、最近絵本で読んだおばけ屋敷が浮かんだ。そして、さらにその廃墟と廃墟の間を、黒い影が横切るのを目撃した。ユウイの顔からますます血の気が引いていく。

（こきてこむにんげんもこわいけど、おばけにあいにきたわけでもないのに……！…）

ユウイはすぐさまこの場から離れようとしたが、自分がどこから来たのか全くわからない状態になつていて。とりあえずまた来た道を引き返そと振り返り、そこで小さく悲鳴を上げた。

（がげがちかづいてくる……！…）

何故、先ほどまで目の前にいた影が自分の後ろにいるのかわから

なかつた。コウイは転がるように廃墟に向かつて走り始めた。しかしすぐにそれが間違ひだつたと気付いた。廃墟はどれも似た造りになつていて、見分けがつかない。路地を行つたり来たりしたときと同じように、今度は廃墟の群れの中で迷子になつてしまつた。

どうする事もできなくなつたコウイはその場にへたりこんだ。ガシャリ、ガシャリ、と奇妙な音が自分のすぐそばまで近付いてきては遠ざかる。それがコウイの不安と恐怖を煽つた。

コウイはなんとかこの場をやり過ごそうと目を固く閉じ、耳をふさいだ。そうしてしばらく息を潜めていたコウイだが、真つ暗で何も見えず聞こえない状態が、よけいに不安を煽つた。たとえば、自分が目を閉じている間に何かが起こり、そして得体の知れない何かに見知らぬ土地に連れ去られてしまつたのでは。そんな考えが頭をよぎつた。

「それはいや…………！」

コウイはおののくのののの目を開いた。自分の周りに誰もいない事を確認すると、耳をふさいでいた手を放す。奇妙な音はもう聞こえてはこなかつた。

「こんなまち、もういや…………ぜつたいおばあちゃんのところにかえる…………」

コウイはふりうと立上がり、歩きだそうとして、けれどその場に立ちすくんだ。

「かえりみち…………わからないんだつた」

コウイは堪えきれず泣き出してしまつた。野良犬も見つからないので、ポシェットもみつからない。もう泣くのを我慢していくても、仕方がない気がした。

「みんなかつて…………かつてすぎるわ…………かつてにいなくなつたり、あらわれたり、つれできたり…………きらいになつたり」

今は怖いというよりも、寂しくて虚しくてたまらなかつた。こんなことなら、さつきの物音の正体に連れて行ってもらつた方がましだつたかも知れないとさえコウイは思った。

涙で滲んだ目を袖で拭いながら、今までの出来事やこの街に来てからの出来事を思いだし、胸の中がじわじわ押し寄せて来る暗闇に飲み込まれていきそうだった。

「もういや！ ゼンぶわたしのせいじゃないのに……」

今まで我慢していたものが、叫び声になつて一気に吹き出した。廃墟の隙間に、自分の声が吸い込まれていくのを感じた。どんなに泣いても叫んでも、誰にも自分の声は届かない。けれど、そんなことはもうどうでもよかつた。もう、誰の顔も見たくない！ そう叫ぼうとした瞬間。

チリン……と、鈴のような音色が、耳の奥に広がった。

「なに……？」

ユウイは、はつとして周囲を見渡した。するとまた小さく鈴の音が広がって、今度は地面の草花が小さくゆらゆらと揺れ始めた。

「……なに？」

不思議と恐怖は無かつた。ユウイが再び周囲を見渡そうとした瞬間、今度は後方から廃墟の群れに吸い込まれるように風が吹き、ユウイの一つに分けて結んでいた髪がふわりとそよいだ。地面の草花が大きく揺れ、砂埃が舞い上がる。

「かぜ……？ けれどふつうのかぜじゃない……」

鈴の音が優しく耳元をかすめる。気がつけばユウイは、全てのものがその風と共に廃墟と廃墟の間に吸い込まれていいくような錯覚に捕らわれていた。

「つばさ……？」

けれど、それには頭も胴体も無かつた。真っ白な一対の翼だけが、風に乗つて羽ばたいている。気がつけばユウイは、その翼に誘われるよう走り出していた。もうこの場所に、恐怖も寂しさも感じていなかつた。

鈴の音が、またユウイの耳に届いた。さつきよりも大きくなつた気がした。

「このさきに、だれかいるの？」

ユウイはその音を頼りに、背中には暖かい追い風を感じながら、廃墟の群れを走り抜けていく。目の前の翼を見失わないように、何度も崩れた煉瓦や石に足を取られ転びそうになりながら、ユウイは息を切らし走り続けた。

「ここは……」

暗く長いトンネルを抜けたように、一瞬目が眩んだ。

ユウイの目の前に、広大な砂の大地があつた。そしてそこには水の抜けた湖のような大きなくぼみがあり、その中心を小さな翼が旋回していた。

おそるおそる、ユウイはくぼみに近付いた。この大きなくぼみのことを、ユウイは知っていた。

「せんそうの、つめあと……」

今から何百年も前の出来ごとなのに、今も変わらずに残っている、大きな爪痕。

ユウイは吸い込まれるように、くぼみの中を覗き込む。そこには、見たことのない鋸びた金属製の板や棒、導線などが半分以上砂に埋もれ、散らばり、突き刺さっていた。

そしてその中に、どうやって見てもこの場に似つかわない人間の後ろ姿を見つけた。

淡い金色の髪と真っ白な服の袖がキラキラと光を浴び、風に揺れ、手首に通されたいくつもの輪がチリンと小さく音を立て、揺れる。この街に来てから、まだ一度も見たことのない人物だった。あんなに綺麗な髪の人は、今まで見たことがない。ユウイは足音をたてないように気をつけながら、身を乗り出してさらに崖のようなくぼみの淵から中を覗き込んだ。白い翼が、その人物の周りを旋回し、華奢な手の上に舞い降りた。

（おんなのこ……？）

ユウイはその人物の顔がもつとよく見えないかと、さらに身を乗り出した。

その気配を感じたのか、相手がこちあらを振り返った。

田が合つた。

(おんなのこ。しかもきれいでかわいい)

遠田に見ても、その少女の容姿は田に甘かつた。琥珀色の大きな瞳が揺らいで、じわじわにとても驚いている様子だつた。

しばらくすると、少女がこちらに向かつて歩き始めた。少女にみとれていたコウイは、そこでふと我に返つた。

このままだと、きっと何か少女に訊かれて話さなくてはいけなくなるに違いない。それは嫌だ、と、ユウイはその場から逃げ出そうとした。しかし、逃げ出したら、帰り道を誰に訊けば良いのだろう？ そう考えると、身動きがとれなくなつてしまつた。

少女はユウイの真下まで来ると、不思議そうに首を傾げた。ユウイは、やつぱり誰かと会話するのは怖いと、その場から逃げ出そうとした。

振り返り走り出そうとしたその時、周りの風景がぐらりと揺れた。くぼみの淵に立つていていたせいでバランスを崩し、砂に足を取られた。

(おちる……！…)

くぼみと言つてもかなりの深さがある。きっとこのまま自分は死んでしまうに違いない。ユウイは固く目を開じた。

(このまちにきたのが、きっとすべてのまちがいだつたんだわ) ガクン、と、何かに腕を引っ張られて、ユウイは目を開いた。上を見上げれば、自分の腕を誰かが引っ張つていて、そして足下では、少女が目一杯手を伸ばし自分を受け止めようとしてくれていた。腕を掴んでいる誰かが、ユウイの腕を掴んだまま、くぼみの所々から飛び出している金属の上に足をかけ、ゆっくりと降りていく。そうしてユウイは少女の手の届くところまで降りされ、少女に腰を支えられると、そのまま抱き締められた。

少女に抱き締められ、しばらく唾然としていたユウイだが、恥ずかしくなつてきたのか顔がどんどん赤くなつていつた。それに気付いた少女が、心配そうにユウイの顔を覗き込む。ユウイの顔はますます赤くなつた。

「いいかげん、放してやれよ」

背後から呆れたような声がして、ユウイの体がこわばつた。少女が手を放すと、ユウイはその場にへたりこんだ。今日は、一体何度も腰を抜かしただろう。

「おまえ小さいんだから、受け止められるわけないだろ。よく考えて行動起こせよ」

小さい、と言われたので、自分の事を言われているのかと思ったユウイは、その場で俯きちぢこまるように膝を抱えた。すると、少女もその場にしゃがみ込んだ。

きっと、なんて変な子だろうと思われてるに違いない。もう一人の誰かと、今に大笑いされるに決まっている。ユウイはこのままくぼみの中で砂に埋もれて死んでしまいたいと思つた。

が、ユウイの予想に反して、少女はユウイの頭の上に手を乗せ、ユウイの頭を撫で始めた。驚いて顔を上げると、少女が優しく笑いかけた。その笑顔を見て、ユウイは泣き出したい衝動に駆られた。けれどユウイは、自分の背後にある人影に気付き、鼻をすすりながら後ろを振り返った。すると、綺麗な蒼い瞳がこちらを見つめていて、そして一言言い放つた。

「汚い顔」と。

ユウイの頭に、大きなお星様が直撃したように感じた。口をぱくぱくさせ、必死で何か言葉にしようとしたが、言葉にならなかつた。「大体、こんなところで何やってんだよこの馬鹿！！」

いきなり怒鳴られて、ユウイはさらに驚いた。蒼い瞳の少年が、口をへの字に曲げ、ユウイの前で仁王立ちしている。その姿は、怒つたときのマーガレットに良く似ていた。

「パン屋の……おじいちゃんとこの……？」

ユウイはこの少年の顔に覚えがあつた。この街に蒼い瞳で黒髪の少年は彼一人しかいない。確か、この少年の名前はヨーダだ。

彼の瞳は、この街の誰よりも深い色と輝きを持っていた。世界中

を探せば、黒髪で蒼い瞳の人間なんていぐらでもいるに違ひなかつたが、彼のそれは、コウイには少し違つて見えていた。

そして、彼は無口で無愛想なことで有名だった。コウイもマーがレットと初めて彼の家へ挨拶に行つたとき、奥で店番をしていた彼を見て、このひととはぜつたいなかよくできそうにないのよ……と、十代とは思えない彼の威圧感（店番なのに）に怯え、早々に帰つた記憶があった。

「一体どうやつてここまで来たんだよ……何しに来たんだ？」

ただの質問も、彼の口からだと今のコウイには尋問のように聞こえてくる。コウイは完全に萎縮してしまい、何も答えることが出来なかつた。

「……とにかく帰れ。おまえ、ここには来てはいけないって親に言われなかつたのかよ」

俯き黙り込むコウイを見て、ヨーダが溜め息をついた。その溜め息を聞いて、またコウイの目に涙が滲んだ。悪い事なんて、何もしていいのに。

（いつもやう、みんなおなじよつて、せこいこためいきつくんだわ）バチン、と、頭の上で音がした。おやるおやる顔を上げると、少女がヨーダの口に両手を当てていた。

「いてえな！ お前はこの状況で喧嘩売つてんのかー！」

ヨーダが、不機嫌そうに少女の手を振り払う。少女も不機嫌そうにため息をつき、それから人差し指で口の周りに円を描き、指を折り曲げた。

「あー……はいはい、どうせ俺はいつも口が悪いですよ」

ヨーダは少女から目を逸らし、あからさまに不機嫌な態度を見せていた。

「ここにいた事がバレたら、一番まずこのはお前だろ……」

少女がヨーダの言葉に答えるように手をひらひらと動かすと、ヨーダが深いため息をついた。コウイはその様子を見て、あれ？ と首をかしげた。

（「の」）、ちつきからひとこともはなさない）

二人のやりとりから、少女は耳は聞こえている様子だった。けれど一言も言葉を発しないので、もしかすると喋れないのではないかとユウイは思った。

しばらく一人の様子をうかがっていると、少女がユウイの前までやって来てしゃがみこみ、指で地面の砂をなぞり始めた。

ユウイは自分の目の前にある顔を、まじまじと見つめた。長い睫毛と琥珀色の瞳がとても綺麗だった。

ユウイの視線に気がついたのか、少女が顔を上げた。そしてトントンと地面を叩いた。見ると、砂の上に文字が短く書かれていた。

“名前は？”

真っ赤な顔でしゃくり上げ、瞳を潤ませるユウイを見て、少女は“ゆつくりでいいから”と砂の上に付け加えた。

ユウイは呼吸を整えて、少女の優しい瞳を見た。

「……ユウイ。あなたは？」

少女が再び砂の上をなぞる。

“カナタ”

砂の上にはそう記されていた。

「……風使いだよ

ヨーダがため息をつき、付け加えるように言つた。どこか諦めたような口調だった。

「かぜ、つかい……？」

「そう。風使い。風の塔の」

「聞いてないか？」と、ヨーダがユウイに問う。そこでカナタと名乗る少女が、困ったような顔をヨーダに向けた。

「かぜつかい……？」ユウイは首をかしげ、ヨーダを見た。どんなに頭を巡らせてても、風使いなんて誰からも聞いた事が無かつた。もちろんマーガレットからもだ。

カナタがヨーダに何かを伝えると、ヨーダは「大丈夫だろ」と一言だけ答えた。カナタは自分の正体をあまり知られたくないよう

見えた。

「今更だろ。それに、俺ヨイツの事知ってるよ。名前聞いてだいたいわかった」

ヨーダのその言葉で、ユウイはぎくりとした。自分の事を知っている。おそらくそれは良い意味ではないだろ。街でのユウイといえば、めんどくさくて変な子なのだから。

「言いふらすような相手がいないから、妙な噂も広められないだろ。ユウイの顔が、恥ずかしさからみるみる赤くなつた。そんな事、今初めて会つた人にまで言うことないじゃない、と。

ユウイの顔色を見て、カナタがきょとんとしている。ユウイがカナタを知らないように、カナタもユウイの事を全く知らないようだつた。

「……それつて、どういうみなのよ」

「どうつて……それは自分が一番良くわかつてんじゃないのか？」

分かつていても、ユウイは聞き返さずにはいられなかつた。ユウイの顔がますます赤くなる。それは恥ずかしさからではなく、怒りの気持ちからだつた。

（むひょ「ひじょうでぶあいそつ、おまけにせいかくはいじがわるい！…）

ユウイは砂の斜面から突き出している鉄骨に足をかけ、砂の斜面をよじ登り始めた。

「どこへ行く気だ？」

「かえるのよ！　いまからいいふらしてくる…」

「言い触らすつて、何を？」

自分でも、一体何を言い触らそうとしているのかよくわからなかつた。二人は一体何を隠したいのだろう？

けれどそれよりも、ヨーダの態度や物言いが気に食わなかつた。だから言い返してみた。それだけだつた。こんなに腹が立つのは初めてだとユウイは思つた。

「なにをつて、いろいろ…！」

「お前、帰り道わかるのか?」

「……わからない!!」

「そうだ、自分は迷子の身なのだ。ユウイはぴたりと足を止め、そしてそのまま砂の斜面をずるずると滑り落ちた。

「……おりられない」

斜面の途中で降りられなくなつたユウイの脇を、仕方なくヨーダが抱えて地面に降ろした。その後ろで、カナタが両手で顔を覆い、肩を小刻みに揺らしている。それを見たユウイが、なんて失礼な二人なの!! と言おうとしたところで、邪魔が入つてしまつた。

グキュルル……。

一瞬時間が止まつたかのようだつた。ユウイのおなかの虫が、こじぞとばかりに鳴き始めたのだ。

「……お前、それは面白すぎるだろ」

ユウイは涙目になりながら、恥ずかしくて死にそうなのを必死で堪えていた。

「仕方が無い、連れて帰るか……カナ、これ持つてろよ」

ヨーダはカナタに小さなネジや導線を渡すと、ユウイに背中に乗れと促した。

「くつじょくてきだわ……」

そう呟くと、ユウイはヨーダの背中に顔を埋めた。「鼻水つけんなよ」とヨーダに言われて、ユウイはヨーダの背中を何度もポコポコと殴つてやつた。

「お前、本当に何でこんなところに一人で來たんだ?」

砂の斜面を登りながら、ヨーダが不思議そうにユウイに訊いた。そういえば何でこんなところに來たんだつけると首を傾げたところで、ユウイは「あつ!」と声を上げた。

「ポシエット! ポシエットをさがしていたの! のらいぬに、もつていかれて」

「ポシエット?」

傾斜を登り切つたところで、ヨーダは下にいるカナタに登つて来

るよう声をかけた。それからユウイを背中から降ろすと、何やら「」
そごそと自分のポケットを探り始めた。

「もしかして、これの事か？」

そうして差し出したヨーダの手には、野良犬に連れ去られたユウイのポケットがあつた。泥だらけでしわしわのくまのポケットは、今にも泣き出しそうな顔になつていた。それを見たユウイも、嬉しくて泣き出しそうになつた。

「野良犬って、たぶんアンクルの事だろ？」

「アンクル？ それって、くろくておおきな？」

「そう。野良犬のアンクル。とぼけた顔していつも鞄ばかり狙つて
る、街じゅ結構有名な野良犬だよ」

ユウイはポケットの中身を確認しながら、そんな野良犬の話はマーガレットから聞いていなかつたなと思った。聞いていれば、ポケットを持つて行く事もなかつたのに。あれ、だけビポケットを窓から放り投げたのはマーガレットではなかつただろうか？

頭を悩ませるユウイの思考に気付いたのか分からないが、ヨーダは「マーガレットなら知らないだろうな」とユウイに言つた。「なぜ？」とユウイがヨーダに問う。ヨーダは「さあな」と答えただけだつた。

「さつき路地で見つけて、また誰かがアンクルにひつたくられたな
あと思つてさ、子供のポケットだし、今ごろ泣きながら探して
んじやないかと思つて」

そう言つてヨーダは伸びをし、ユウイを見た。ユウイは栗色の瞳を潤ませ、振り返つたヨーダの顔を見て驚いていた。無表情で無愛想が、ユウイの前で笑つていた。

「人の噂はあくまで噂だな。勘違いしていた、お前の事」

「なに？」

「さあ？」

くつくつと笑い出すヨーダに、ユウイの中ではもう不思議と怒りの気持ちはなかつた。この子結構いい子なのかも知れない、そう思

つても口には出さず、照れ隠しにスカートの砂を払った。顔は真つ赤だつた。

そのユウイの表情を見て、ヨーダがまた笑う。

「……さつきから、レディにむかってしつれいだとおもうの」

「はいはいレディね。物凄く鼻水出ますよ、お嬢さん」

完全にからかわれている。ユウイはくしゃくしゃのポショットからティッシュを取り出すと、勢い良く鼻をかみ、さらに顔を赤く変化させた。

ユウイが鼻をこれでもかとかんでいると、後から登つて来たカナタが、くぼみを登り切る手前で片手をひらひらと上げて見せていた。それに気がついたヨーダがカナタの腕を引っ張り、くぼみを登るのを手伝つた。

「お前、先にこいつと塔に戻つてろよ。俺一度家に戻らないといけない用事ができた」

カナタが頷くと、ヨーダがぽんとユウイの背中を押した。ユウイがもじもじしながらカナタの服の袖を掴むと、カナタはユウイの手を袖から外し自分の手を握らせた。服の袖から覗く白い手は冷たそうに見えたが、ちゃんと温かな体温が伝わつてくる。ユウイは何故だかまた泣きたくなつたが、今泣くのはおかしなことだわと、思い切り鼻をすり涙が落ちるのを堪えた。

「そいつにちゃんとついていけよ。じゃあないとずっと迷子のままだぞ」

ヨーダは預けていたネジをカナタから受け取ると、一人路地に向かい走り出した。

ユウイは慌てて走り去るヨーダの背中に向かつて叫ぶ。

「ちょ、ちょっとまつて！ わたし、自分のおうちにかえりたいのよ！」

「残念。このまま帰れると思つたら大間違いだ、チビ！」

振り返りそう叫ぶと、ヨーダは入り組んだ路地の中に入つてしまつた。

「チビとはなにごとよ！」と、ユウイはもうすでに路地に飲み込まれ見えなくなつたヨーダに向かつて叫んだ。いちいち腹の立つ事を言う奴だわと、ユウイは頬を膨らませて力ナタの顔を見た。力ナタはそんなユウイの顔を見て、また笑つていた。

カナタに手を引かれ
二七へは路地とほほへたくの反対方向へと
歩き始める。

「これからどうしていくの……？」

不思議と不安はなかつた。ただ、無言で歩き続けるのも落ち着かないでの、コウイはカナタに聞く。けれどすぐにカナタが喋らない事を思いだし、やっぱりいいわと慌てて言つた。訊きたい事はたくさんある。けれど、それをいちいち地面に書き記していたら時間がかかるつてしまふ。

そう思つても、なんだか落ち着かない。そんなユウイを見て、力ナタは立ち止まり、地面を見渡して小さな石を拾い砂の上に文字を書き始めた。

“大丈夫。後で、ちゃんと家まで送るから”

書き記された文字を見て、ユウイは膨れつ面を力ナタに見せた。
「あなたがそうおもつっていても、ヨーダはそうじやないかもしけな

それを聞いて、力ナタが苦笑いをする。

“なんていふか……”

卷之三

“ああや二で
いも相手をかうか二で
色々話してゐみたい”

“悪い癖”と力な夕は後は付に足した。なんとかよぐれからないなあと、ユウイは難しい顔をして、カナタを見た。一体ヨーダは何を試しているのだろう。たんにからかいたいだけじゃないのかと、ユウイは思った。失礼で性格が悪いだけではないのか。

そんなユウイの考えを見通したのか、再びカナタが文字を書き始めた。

“普段は、ちがんとちがっていんだよ”

「一体彼のどこに優しさがあるのだろうかと、ユウイは思った。地面上に書かれた文字を首を傾げて見つめていると、わざとやさしいという言葉は、ちょっと面白いと感じた。

「あの、もうひとつ、きいてもいい？」

もじもじとためらいがちにカナタを見つめるユウイを見て、カナタがうなづく。

「かぜつかいで、まほつかいのなまでしょ？　ほつきこの元氣にはのらぬよつて、いどうはしないの？」

“もしかして、疲れてる？”

ユウイが何を言いたいのか、カナタにはすぐ伝わってしまったようだった。けれどユウイは必死に首を横に振った。

「そ、そういうわけじゃないの！　そういうわけじゃ……」

真っ赤な顔でユウイは否定したが、その時、ユウイのおなかの虫が再びうなり声を上げた。

“ごめんね、ほつきにはのらないんだよ”

正直、その言葉にユウイは少しだけがっかりした。朝から走ったり、泣いたり、転んだり。疲れているし、おなかはペコペコ。もじ楽に移動できるのならそうしたかった。

“そもそも、魔法使いと呼ぶには少し違つかもしれないし”

「でも、さつき、なにかとばしていたでしょ？　」

ユウイの疑問に、カナタは少し考えて、また地面上に文字を書き始めた。

“ほんの少しだけ、風を操ることしか出来ないから”

そして“だから”と続け、

“君の想像する魔法使いとは、言えないと思つ”

と綴つた。

なんだかよくわからないわと、ユウイは思った。風を操るのも魔法では無いのかしら。

でも、ユウイの想像する魔法使いといえば、とんがり帽子でほつきに乗り空を飛んだり、カエルやトカゲや葉っぱを煮込んで妙な薬

を作つてみたり、それを人に飲ませて動物にしてしまつたりするものだつた。そう考えてみると、違うのかな、とユウイは首をひねつた。なんだか納得はできないけれど、違うんだわ。と。

「わたし、その、かぜつかい？　はじめてみたわ。この街にあなたがいること、きいてなかつた」

なんでそんな面白なこと、ママは教えてくれなかつたのだろう。ご近所のつまらない夫婦げんかの話を聞かされるより、風使ひの話の方がユウイには何倍も興味がある話だ。

その事をカナタに伝えると、何やら困惑している様子だつた。何かまずい事を言つてしまつたかと、ユウイは慌てて話題を変える事にした。

「あの、もうひとつだけ、おしえてほしいの。あなたのなまえ、めずらしいきがするの」

名前の響きが、今まで聞いた事のないものだと、ユウイは最初に名前を聞いた時から思つていた。

カナタが地面にユウイの見た事のない文字を一つ書いた。ユウイは読めずに首を傾げてカナタを見た。

「これ、なんてよむの？　はじめてみるわ」

カナタはその隣りにも文字を書いた。「にほん？」と、ユウイがカナタに確認するように読んだ。

“この街から北西にある国。今の「日本」

「ああ！　それなら知つているわ！」

「ウウコク、ユウイは何度か目にした事のある香国という字を地面に書いて見せた。香の田が目になつていたので、カナタが一本線を消した。

“香と、薰。同じ読みで二つある。あの国は今、二つに分かれてしまつてゐるから”

「えー、と、ユウイは感心するような返事をした。ユウイは自分の住んでゐるところ以外、地理については全くと言つていいほど無知だつた。学ぼうにもこの街には学校がないし、家に本があつても、

ユウイには難しそうで読めないものばかりだった。

「えっと、おとうさんかおかあさんが「コウコクの人なの？」

“多分違うと思う。父親は会った事がない人だけど、名前はトーマ
だし、母親はエルだし……一人とも、よそ者である事には変わりな
いけど”

その言葉に、ユウイは少し戸惑った。自分の書いた文字をしばらく見つめていたカナタの表情もまた、複雑そうだった。

それからユウイは、エルという名前に聞き覚えがあった。街の中
心部から少し外れたところにある一軒家に、その名前と同じ人が住
んでいる。ただ、面識はなかった。この街に来たばかりの時、マー
ガレットに連れられ、街の人達とは一通り挨拶をしているが、エル
にだけは会わせてもらつていなかつた。ただ、エルという女人人が
住んでいるとだけ、マー・ガレットに教えられた。

そして、今日の前にいるこの少女に至つては、顔も名前も、その
存在さえ教えてもらえなかつた。こんな目立つ容姿の子は、一度で
も会つていれば嫌でも忘れる事はない。

エルとカナタの二人は、親子。ユウイは街外れの一軒家の住人が、
カナタの母親であるエルなのか確認しようとしたが、カナタが“行
こうか”と地面に書き立ち上がつてしまつたので、聞けぬままユウ
イも立上がりカナタと砂の大地を歩き始めた。

自分の手を引き歩き始めるカナタの後ろ姿を、ユウイはぼんやり
と見つめた。

話す事が出来ず地面に言葉を記すカナタ。人と話す事が上手く出
来ない自分。重ね合わせて、なんだか急に恥ずかしさが込み上げて
きた。地面に文字を書き記す行為に、ユウイは少し煩わしさを感じ
た。どこかめんどくさいと感じてしまつた。結局自分も街の人達と
同じだわと、そう思うと酷く恥ずかしく、また悲しくなつた。

カナタは自分の話を、ちゃんと聞こうとしてくれたのに。
ユウイは立ち止まり臉を擦つた。何度も拭つても、涙がこぼれて止
まらなかつた。

カナタが心配そうにユウイを見つめ、自分の服の袖でユウイの涙を拭つた。

「おしえて」

ユウイの言葉に、カナタの手が止まる。

「わたし、わたしも、ヨーダみたいに、あなたのいうことかかなくともわかるようになるわ。ううん、書いてもいいの、ただ」

深呼吸して、ユウイはカナタを見た。

「あなたとおともだちになりたい。だから、ちゃんとあなたとおはなしができるようになりたいの」

カナタが、じっとユウイの顔を見つめる。

しばらくすると、カナタは頷きユウイの頭を優しく撫でた。ユウイの瞳から、涙が溢れ出る。

誰かに傷つけられたり、痛みを感じるのは自分だけだと、なれない場所で何も上手くいかない事への苛立ちから、どこか勘違いをしていたのかもしれない。その事に、今逆の立場になつて気付いた。気付いたのなら、少しづつでもいいから、変わつていきたい。

「ごめんなさい。ありがと」

ユウイの言葉に、カナタはただ優しく笑っていた。その笑顔が、すべてを理解し受け止めてくれているように感じた。

言葉の伝え方に差なんて無くて、受け取る側の気持ちしだいだつたりするのかしら。

暗く、細く入り組んだ路地を抜けると、太陽の光が降り注いだ。周りの景色が休息に色付くのをユウイは感じた。今までまともにこの街の風景を見る事なんてなかつた。

もう廃墟の群れも怖さを感じない。

廃墟の隅で咲き乱れるピンク色の小さな花が田に止まつた。風に揺れるそれが、とても可愛らしく感じた。

今まで色々な物を見逃してきたのかもしれない、ユウイは思つた。

廃墟を抜けてしばらく草むらを歩くと、田の前に煉瓦造りの小さな塔が見えた。ユウイは立ち止まり、カナタを見上げた。

「ここに、じょうがあるの？」

ユウイがそう訊くと、カナタが頷いた。

「お前らさあ、何で一度家に帰った俺より遅いんだよ

声のした方へ目をやると、塔の左手に立つ木の下に、ヨーダが腕組みをして立っていた。「のんびり歩いてんなよなー」と呆れ顔でカナタに言つと、ヨーダは服の襟から手を突つ込み銀色の古びた鍵を取り出した。

「あの……わたしどうすればいいの？ ちゃんとおつちにかえれるの？」

ヨーダが扉の鍵を開ける手を止め、振り返りユウイを見た。ユウイにはいまいちここに連れてこられた理由が分からぬし、こんな街の外れまで来たのも初めてだったので、不安もあつた。

「ああ。お前はあの場所でこいつに会つた事と、ここに来た事を誰にも言わなければそれでいい。家にもちゃんと帰してやるよ」

ヨーダの言葉に、ユウイは訝しげに眉を顰め唇を尖らせて見せた。「何だよその顔笑わせたいのかよ」と、ヨーダもまた眉を顰めてユウイの顔を見ていた。

「それだけ？ ほんとほんとうかこじょうとしているとかじやなくて？」

「お前誘拐して何が楽しいんだよ。そんな心配事、誘拐されるくらい魅力的になつてから言つてください鼻たれお嬢さん」

「鼻垂らすくらい若いつちからこらしない心配事すんな、チビ」。

そこまで言われたユウイは「むつかーー！」と顔を真っ赤にし頬を膨らませ抗議した。「いぢいぢ笑わせなくていいから」と、ユウイを適当にあしらいながらヨーダは扉の鍵を開け始めた。

「だいたい、それだけって言うけどお前守れるのかよ」

開かれた扉の前で、ヨーダが再びユウイに問うた。ユウイは塔の中が気になり、背伸びをして中を覗こうとしたが、それをヨーダに阻まれてしまった。

「だれにもいわないわ。いいふらすあいてがいないっていったのはあなたじゃない。でも、どうしていってはいけないの？」

「言う必要がないから。それだけ」

「ええ？」

それって答えになつてないんじゃないの？ 訳が分からずユウイは首を捻つた。助けを求めるようにカナタを見ると、カナタも人差し指を口に当て、笑つただけだった。

「ないしょのことなら、なんでここにわたしをつれてきたの？ りゆうがないわ？」

困惑顔でもじもじと一人を見るユウイに、ヨーダが紙袋を一つ差し出した。ユウイはそれをそつと受け取り、おそるおそる中を覗き込む。すると中からふわりと甘い香りが溢れ、ユウイの顔の周りに広がった。

「腹減つてんだろ？ 食つていけば？」

中には柔らかそうな白パンと、甘い香りの元になつてているであろう木の実の詰まつたパンが入つていた。ユウイは思わず顔を緩ませたが、すぐに首をぶんぶんと振り、袋とヨーダを交互に見やると再び訝しげで唇を尖らせる表情を見せた。

「どく」

「入つてねーよ。返せクソガキ」

ユウイは袋を抱えカナタを見た。すると二人のやり取りを見ていたカナタは口元を押さえ、くすくすと笑つていた。

「まったく野垂れ死にされたら迷惑だから持つて来たのに。あんな

腹の虫聞いた事ねーよ

ヨーダが不機嫌そうにユウイの背を押し、ユウイを塔の中に招き入れた。

ぐいぐいと背中を押され塔の中へ入つていくと、目の前に細い階段が現れた。先にカナタがその階段を駆け上がりしていく。

「こいつて、いつたいなにをするところなの？」

残されたユウイはヨーダに手を引かれ、薄暗い階段を上がり始めた。ヨーダは特に何も答えず、ユウイも何か文句を言われたらいやだなあと、それ以上何も訊かなかつた。途中いくつか扉を見たが、すべて外側から鍵が掛かっていた。

薄暗い階段を上りきると、今度は鍵の付いていない扉が見えた。その隙間からわずかに光が漏れている。

「入るぞ」と扉に声を掛けて、ヨーダが扉を勢いよく蹴り上げた。扉は鈍い音を立て、ゆっくりと開き始めた。

ユウイが恐る恐る中を覗くと、奥でカナタが大量の本を抱えて立っていた。その肩には、ちょこんと小さな鳥が乗っている。右から左へ、左から右へと、カナタの肩の上を行つたり来たりしていた。

『いつも言つてるけど、足で開けるのやめてよね』

突然、ノイズ混じりのラジオの音声がユウイの耳に入った。ユウイはその声に驚き、キヨロキヨロと部屋の中を見渡した。

「両手がふさがつてましてね」

ヨーダはそのノイズ音をまるで気にしていない様子だった。部屋に入り、自分の足下にある本を広い上げ窓側のテーブルに置くと、椅子の上に積み重なれた本を見て「そつちこそ、読んだらちゃんとしまえよ」と本の片付けを始めた。

『まったくもう……』というノイズ音声とともに、カナタの左肩の上で小鳥が胸を膨らませたのを、ユウイは見逃さなかつた。よく見れば、カナタの肩の上を行つたり来たりしていた小鳥が、カナタの口の動きに合わせて動いている。

自分に向けられる痛いほどの視線に気がついたのか、カナタが『

どうしたの?』とユウイに声をかけてきた。

「なんだか、あつてないとおもうの、それ……」

「すつごじイワカン」と、ユウイは怪訝な顔をカナタに見せた。

その表情を見たカナタとヨーダが、顔を見合させて笑い始めた。

「まあ……本当の声じゃないし、合つてないってのは当然だよな」

ヨーダは片付けた椅子に座ると、テーブルの上の本の中から一冊手に取りパラパラとめぐり始めた。

本当の声じゃないって、どういうことだらう? ユウイは横で本を読んでいるヨーダにそのことを訊こうとしたが、もしかするとそれを訊くのは失礼になるかもしれないと思い、口をもじもじさせながらテーブルの上の積み重なった本を眺めた。カナタはとくに、いつのまにか姿が見えなくなっていた。

積み重なった本の背表紙を上から順番に眺めると、一番下の本とテーブルのあいだに、紙が一枚挟まっているのが見えた。隙間からはみ出した部分には、小さく *pinkish* と書かれている。ユウイがなんとなくその紙を引っ張ると、積み重なった本がぐらりと揺れ、テーブルの上で雪崩を起こした。

「……なにやつてんだよ」

ヨーダが読んでいた本を自分の座っていた椅子に置き、テーブルの上の雪崩を片付け始めた。ユウイも「ごめんなさい……」と謝りながら、テーブルの上は危ないからとヨーダに言われ、床に本を積み重ねていった。

最後の一冊を床の上に置くと、雪崩の下敷きになっていた紙が顔を出した。ユウイはそれを手に取り、首をかしげる。最初に見た *pinkish* の文字以外、ユウイには読むことができなかつた。

首をかしげたまま紙を眺めているユウイに気付いたヨーダが、ひょいとユウイの手から紙を取り上げた。

「その辺に落ちてるの、勝手に読むなよ」

ユウイはコクリと頷くと、再び椅子に座りきょろきょろと辺りを見渡した。どこを見ても本の山。さすがに暖炉の中にまで本が詰ま

つているのには驚いた。

「あれ、さむくなつたらどうするのかしら」
再び本を読み始めようとしていたヨーダに、ユウイが暖炉を指差し問うと、呆れ顔でヨーダが答えた。

「着込むんじゃねーの？」

そう言つと、ヨーダは視線を本へと戻した。ユウイが落ち着きなくもじもじしていると、ヨーダが視線を本に落としたままテーブルの上の紙袋を指差した。先ほどもらつた、パンの入つた紙袋だ。紙袋を掴んで引き寄せると、まだほかほかと温かかった。袋を開けば、またふわふわと甘い香りが広がる。ユウイがその甘く香ばしい空氣の中に浸つていると、バタバタと慌ただしくカナタが部屋に戻つて來た。

紅茶の缶とティーポットを乗せたトレーをテーブルの上に置くと、カナタは部屋の中をぐるぐると周り始めた。どうしたのだろうかとユウイがカナタを見ると、カナタの肩の上の小鳥が、ぴくぴくと痙攣し白目を向いていた。うわあ……やつぱりあの鳥さん、好きになれないわとユウイ思つた。

「そこ。窓際」

溜め息をつきながら、ヨーダが自分の背後にある窓際の棚の上を指差した。ユウイがヨーダの背後を覗き込むと、小さな鳥籠と、その中に金色の卵が入つていて見えた。

カナタがテーブルの上に乗る勢いでその鳥籠を掴んだ。そうして中の卵を取り出すと、それをテーブルの上にコツコツと並べ始めた。「充電はちゃんとしておけよ」と、ヨーダがポットの中に紅茶の葉を入れながら言つた。

カナタが数回卵をテーブルに叩きつけると、カチリと音がして、金色の卵がギザギザの亀裂を入れ割れた。その中にぐつたりとしている小鳥を入れると、カナタは殻を合わせ閉じ、鳥籠の中にそれを納めた。

やれやれと額の汗を拭う仕草をして、カナタは次にテーブルの下

に潜つた。今度は何かしらとユウイがテーブルの下を覗き込もうとすると同時に、カナタが大きなスケッチブックを手にして出て來た。

“朝充電したのに切れたの。まるでヨーダみたいにね”

スケッチブックに付いていた羽ペンを握ると、カナタは筆記体ですばやく文字を綴り、ヨーダに見せた。ヨーダの眉間に深いシワが刻まれる。ユウイは筆記体を解読するのに手間取つてしまい、書かれていることを理解するのが一拍遅れてしまつていた。

「朝置いた卵どこに行つたか覚えてねーとか、お前はあれか、すでにボケが始まつてんだな」

「うちのじいさんより、ずいぶん早いボケだな」。ヨーダは乱暴に紅茶をカップに注ぐと、ユウイにそのカップを突き出した。それを黙つて受け取り、ユウイはなみなみと注がれた紅茶を啜りながら、二人の様子を窺つていた。

“ゴルトさんはボケてないでしょ？ むしろヨーダの怒りっぽいところの方が問題だよ”

そうスケッチブックに書き込み見せると、再び羽ペンを手に取り、カナタは何やら文字を綴つた。その文字は明らかに英語では無かつたので、ユウイには何が書いてあるか分からなかつたが、ヨーダには理解出来た様子で、カナタからスケッチブックを奪うと、その角でカナタの頭を叩いた。

“よけいな単語まで覚えてんなよ！ この馬鹿！！”

「大体片付けた端から散らかしてんじゃねーよ！」と言いながら、ヨーダが何度もカナタの頭にスケッチブックの角をぶつけるので、さすがにユウイもカナタが心配になり、なんとなくテーブルの上のトレーをカナタに渡した。カナタがそのトレーを頭に乗せ防御する。ユウイはヨーダの女の子に対する攻撃の遠慮無さに驚いていた。

カナタがトレーで防御しながら、ヨーダからスケッチブックを取り返した。

“置き場がないんだから仕方がないでしょー？ 半分はヨーダの物なんだからね！！”

「半分じゃねーよ、七分の三くらいだ」

“ それほん半分でしょー！？”

使つていたスケッチブックで、今度はカナタがヨーダの顔を叩いた。カナタはそれで気がすんだのか、椅子に座りヨーダの入れた紅茶を飲み干した。「それ俺のだよ！！」と、ヨーダが鼻を擦りながらカナタを睨み付けると、カナタはヨーダに思いきり舌を出して見せた。

そんな一人を眺めながら、ユウイは口いっぱいにパンを詰め込んで、ふくれつ面を作つていた。カナタがそんなユウイの顔に気付き、笑う。「どさくさに紛れて何やつてんの」と、ヨーダもユウイの顔を、呆れ顔で見て、笑つた。

「このパン、おいしいね」

ほおばつたパンを飲み込んで、ユウイは言つた。ヨーダが少しばつの悪そうな顔をして、新しく注いだ紅茶のカップに口を付けた。

「当たり前だろ。誰が焼いてると……」

“ 焼くのは焼き窯だよねえ？”

ヨーダに見えないよう、カナタがぼこぼこになつたスケッチブックに書いてユウイに見せた。ヨーダが気配を察知し、カナタを見たが、カナタはすでに次のページをめくつていた。

“ 食べたこと、なかつたの？ お店に行つたことはある？”

カナタはヨーダの視線を無視して、ユウイに再びスケッチブックを向けた。

「このまちにきたばかりのとき、あいさつに、おみせにいつたわ。でも、かつたものはママがおともだちのところにもつていつたの」

「それに……」と、ユウイはヨーダをちらりと見て、もじもじと下を向いた。

「なんだよ……」

“ でもそれ以来、お店に近付けなかつたんだよね？”

本人を目の前にして言つのは、とても気が引ける。遠慮がちに頷くユウイをみたカナタが、苦笑とする。

“ほら、だからいつも言つてゐるのに。接客に笑顔は必要だよ、
カナタがそうスケッチブックに書いてヨーダに見せると、ヨーダ
は不機嫌そうに顔をしかめた。

「……おみせ、たのしくないの?」

あんなに美味しそうなパンがいくつも並べられていて、良い香り
がするお店なのに。私だったら、あの場所で店番させてもらえるの
なら、嬉しくて自然に笑みが零れてしまう。いつもヨウイは思ひヨー
ダに訊いた。

「べつに。それより、お前の話」

飲んでいた紅茶のカップをテーブルに置くと、ヨーダがヨウイに
言つた。ぎくり、とヨウイの身が強張つた。

「わたしのはなし……?」

「そう。場合によつては、色々報告しなくちゃいけないから
報告? 一体誰に?」

ヨウイの顔が緊張からますます強張つた。やつぱりこの子、食べ
物で油断させて、最後には自分をどこかに売る気なんだわ。そう考
えると、ヨウイの目にじわりと涙が滲んだ。

ふくれつ面で俯き、涙を目に溜めて今にも泣き出しそうなヨウイ
を見て、カナタがヨウイの肩にそっと手を置いた。顔を上げると、
目の前のテーブルにスケッチブックが置いてあつた。そこには何や
ら頭がつるつるで髪がもじやもじやの、サンタクロースのような絵
が描かれていた。そしてそのサンタクロースの横に、大きな吹き出
しがあり、そこに“私は怖くありませんよ”と大きな字で書いてあ
つた。

「おまえまた微妙な絵を描くなよ。うちのじいさんサンタクロース
じゃねーし、クリスマス当分先だし、そんな喋り方しねーし
うちのじいさん? ヨウイは首を傾げ、しばらく考えると、頭の

上で豆電球をパッと光らせた。つるつる頭で髪の、今日カルペディ
エムで店番をしていた、あのおじいさん。

けれどどうしてあのおじいさんに報告しなければならないのだろ

うか。あのおじいさんは優しい顔をして、実は怖い絵本に出て来る、地獄の番人のような人なのだろうか。

「報告するのはうちのじいさんだけ。あのクソジジイ達には黙つとくから、どうやって“爪痕”まで入ったのか教える」

「……あのくそじい……？」

「……おまえ、クソジジイ集団のこともまだ何も知らないんだな。まあいいや。つるつるしてんのがあと六人いるんだよ。老いぼれのことは置いといて、どうやって爪痕まで入ったのか教える」

ヨーダは腕と足を組みコウイに訊いた。教える、と言われても、コウイは野良犬のアンクルにさらわれたクマのボショットを追いかけて路地を迷子になつたわけで、来た道を正しく覚えているわけでもなかつた。返答に困つたコウイは目を泳がせ、唇を尖らせ言葉を探したが、どうすれば良いのかわからず再び泣き出しそうになつてしまつた。

「……おまえ、アンクルを追いかけてここまで来ただけか？」

ヨーダの問いに、じくり、とコウイが頷くと、ヨーダは何かを考えるように息を吐き、カナタを見た。カナタもなにやら深刻そうな顔をしていたので、コウイはますます不安になり、俯いた。

「別に、わからないならそれでいい。じいさんにはアンクルに連れてこられたつて報告するから。ただ……」

不安な気持ちといつしょに溜めた涙をこらえてヨーダの顔を見ると、ヨーダはカナタをちらりと見やり、溜め息混じりに続けた。

「ここに来るのは今日一回限り。一度と来るなよ。それ食べたら送るから帰れ」

コウイの目から一瞬涙が引き、再び眩むように滲んだ。

「どうして？ どうしてきてはいけないの？」

せつからくお友達になつてくれそうな子に出会つたのに。コウイはぐつと涙を堪えながら、ヨーダに言った。

「元々ここには誰も入つてはいけないことになつてる。といふか、入れないようになつてんだ。おまえが今ここにいることが本当なら

ありえないんだよ

自分がここにいることがありえない？ そう言われても、ユウイは何か特別な事をしたわけではない。アンクルを追いかけて来ただけなのだから。そもそも何故ここへ来てはいけない事になつているのだろう？

「なんで、ここに、つめあとにきてはいけないの？」

ユウイがそう訊いても、一人は何も答えなかつた。

「おともだち、なつてくれないの……？」

どうすることもできなくて、ユウイは不安げにカナタの顔を見た。カナタはしばらく何かを考えて、ユウイの頭に手を乗せ撫でると、部屋から出て行つてしまつた。その行動がお別れを意味しているかのように感じられて、ユウイはとても寂しかつた。

「あんまり長居されても困る。それ食つたら行くぞ

「わたし、かえらない」

ユウイはスカートをぎゅっと握り締めながら、じまりだすヨーダに言つた。ここで帰つてしまつては、この先もずっと友達なんて出来ないような気がした。

「わたし、かえらない。ママとのやくそくだもん。おともだち、なるまで、かえらない」

ユウイはヨーダを真つ直ぐ見据えた。ぼろぼろと涙をこぼしながら、鼻をすすり、スカートを握り締めて。そんなユウイをヨーダも見据えて、視線を外さなかつた。

深い蒼の瞳が、じつとユウイを見つめる。油断すると水底に引きずりこまれそうなその瞳はとても怖かつたが、ユウイには同時に大地を包み込む空の色にも見えたので、その目を逸らす事はしなかつた。

「……ママとのやくそくね。友達作らないと家に入れてもうえないとか、そんなことだら」

ヨーダが呆れ顔で溜め息をついた。そして、ユウイにティッシュを差し出してきた。ユウイはふん、と鼻を鳴らすと、済まし顔を作

りながらティッシュを受け取った。

「そういう理由なら、なおさら駄目だな。マーガレットのいう”友達”の中に、あいつは含まれていない」

「え？」

ユウイは鼻をかむ手を止め、ヨーダを見た。

「言葉の通りだよ。あいつを友達にしても、おまえの母親は認めないと思うよ」

ヨーダの言つている意味が理解出来ず、ユウイは首をかしげた。そこへ、先ほど部屋を出ていったカナタが戻つて来た。その腕には本が数冊抱えられていた。

カナタが、持つて来た本をユウイの前に差し出した。持つて来た本の数は三冊。一番上に重ねられた本の表紙を覗いてみたが、ユウイにその本の題名は読めなかつた。

「……ちょっと待つた。お前、その本こいつにやる気？」

ヨーダが困つたように額に手を当てながら、カナタに言つた。カナタは大きく頷くと、先ほどよりもさらにユウイの前に本を差し出して来た。ユウイがそれを受け取つたとすると、そこにヨーダの手が割つて入つた。

「無責任。また会える保証なんて無いし、会わせる気も無いよ、俺は」

そう言つと、ヨーダはカナタが持つて来た本をひょいと取り上げた。本はカナタの頭上高く上げられ、そのままヨーダの後ろ手に隠されてしまった。

「なに？ なんの『ほんなの？』

ユウイは本の内容が気になつて仕方が無かつた。一体カナタは自分に何の本を渡そうとしたのだろう。

「関係ない。もういいだろ、帰るぞ」

ヨーダが足下に積み重なれた本を跨ぎながら、部屋の扉に向かつ。ユウイはその場を動こうとしなかつた。

ユウイにはヨーダが悪魔に見えた。せつかくお友達が出来ると思

つたのに、ことじとくそれを邪魔するのだ。

ヨーダが溜め息をつき、眉間に皺を寄せた。ユウイはそれをみても怯まなかつた。ユウイとヨーダが睨み合つ。カナタがそんな二人の間でおろおろとしていた。

「おいガキ、いいかげんにしろよ」

「ガキじゃないもん。ぜつたいおともだちになつてもらうんだから、それまでかえらない」

「おまえの都合なんてどうでもいいんだよ。早くしないとターニャも帰つて来る。そうしたらおまえ、他のじじいにも今日の事報告されて、この街追い出されるぞ」

「ターニャ？」ユウイはまた聞き慣れない名前が出てきたので首をかしげた。「あー……こいつターニャもしらないのか」と、ヨーダは苛立つように頭を搔いた。

「ターニャなんてしらないわ。ママがおしえてくれないもん」

「ママにばっかり頼つてないで、少しほ自分から知ろうとしてみるよクソガキ。だつたらお友達もママに探してもらひえよ。自分で探せないんだから。逃げ出してばかりの鼻たれ少女」

ユウイの顔が、破裂しそうになるまで膨らんだ。

「おともだちみつけたのに、あなたがじやましているんじゃない！」

「わたし、もうにげないもん！！ おともだち、これからたくさんつくるんだから！！」

「言つたな鼻たれ。だつたら友達作つて見せにこいよ。そつしたらカナと友達になつてもいいだ。認めてやる。まあ無理だらうけどな「そんなの、かんたんなのよ！！」

ユウイはこれまでないくらいに頬を膨らませ、真つ赤な顔でヨーダに言い放つた。ヨーダはそんなユウイを見てか、にやりと笑い、カナタを見た。カナタはユウイの勢いに、呆気にとられてしまつているようだつた。

「じゃあ一週間後。友達作つて連れてこいよ。そうだな、ただ普通に連れて来られても面白くない。七人の主の孫でも、連れて来ても

「かわいが

「七にんのあるじ?」

「そう。さつき言つたつるつる頭のじじい集団。その孫と友達になつて連れて來い。全員は無理だから、一人で良い。俺を抜いて、カルエル、トエル、ミシェル、キヤロル、フィフィエル、ラスフェル。そのうちの誰か一人でも連れて來られたら、じじい集団も文句は言えないだろうから」

三一夕の意図がどういう事かわからなかつたが、ユウイは大きく頷き、そしてカナタを見た。絶対に、この悪魔の魔の手からカナタを取り戻すんだから！　ユウイは心配そうに二人の様子を見つめるカナタに、心の中でそう叫んだ。

帰り道、ユウイはヨーダに連れられ、砂の大地を歩き、路地裏を抜けた。その帰路が、なんとも不思議なものだった。一度通った道を何度も通つてみたり、来た道を引き返したり。まるでわざと来た道を分からなくしているみたいで、ユウイはヨーダの意地悪だと思いつつ、立つてしまふがなかつた。道を覚えようと思つていたのに、これじやあ覚えられないじやない！　ユウイは帰路につく間、ヨーダと一言も口を利かなかつた。

路地裏を抜けて、見慣れた大通りに出る。ユウイは、ここからは一人で帰れるとばかりにヨーダの前をすんすん歩き始めた。そしてちょうどカルペディエムの前に差し掛かったところで、買い物帰りのマーガレットに会った。

「あ、ハイ、どうしたの？」

マーガレットの問いに、コウイはどうせにどう答えたら良いのかわからなかつた。すると背後から「散歩、してました」と声がした。振り向くと、真後ろにヨーダが立つていた。

— 散歩?
— えー 夕君と?
— 良かつたわねユウイー

よくなんてないわ！ どうぞにそう叫びそうになつたが、ぐつと堪えてユウイはマー・ガレットに頷いた。

「それじゃあ、俺はこのへんで」

そうこうと、ヨーダは店の中に入つて行つてしまつた。コウイはマーガレットに見えないよう、閉められた扉に向かい思いつき舌を出した。

「……意外な組み合わせねえ」

「コウイが舌を引っ込め振り向くと、マーガレットが不思議そうにカルペディームの扉を見つめていた。

「あんた七の主の孫……というか、あの蒼い目、怖くないの？」

「あおいめ？」

「そう。七の主の孫つてのもあるかもしないけど、あの子のあの目、みんな怖がつて目を合わせないのよ。おかしな話だけど」コウイは扉を振り返る。みんな怖がつて目を合わせない？ それが本当のことなら、ひどく寂しいことではないだらうか？

「なんでこわいの？」

「さあ。なんででしょうねえ？ それはママにもわからないわ」

「ママはこわいの？」

「ママは怖くない。ところが、慣れてるのよ。あの子のお父さんが同じような瞳の色していたから。あの子のお父さん、スピカ山脈の向こう側の少数民族で、あの子と同じ黒い髪で蒼い目してた」

マーガレットは扉を見つめながら、ほんの少し寂しそうな顔を見せた。

「アルト民族、あの黒髪と蒼い目が一部で嫌われていてね、この街にもまだ差別的な目で見る人がいるけど……コウイは平氣なのね」ふうん……。コウイはマーガレットの話を聞きながら、扉を見つめ、扉のガラスに映る空を見ながら、言つた。

「うみと、そらのいろだわ。こわくなんてないもん。きっと、こわがりさんなのね、みんな」

あの悪魔にはもつたといないくらいの、綺麗な蒼い瞳。確かに性格は悪いし失礼なやつだけど、コウイには差別がどういうものかわからなかつたし、する気も起きない。ただみんなから目を逸らされる

自分を想像してみると、なんだか胸の奥がちくちくと痛んだ。

+

次の日の朝、ユウイはいつもより早起きして、街に出ることにした。

朝食を久し振りにマー・ガレットと食べた。そこでユウイは、七人の主について訊こうと思っていたからだ。

「七の主はね、そうね、簡単に言えば、この街を治めている人達ね」「それって、おうさまみたいなひと?」

ユウイがそうマー・ガレットに問うと、マー・ガレットはスープを口に運ぶ手を止め、怪訝な表情で舌を出した。

「ホント、態度だけは王様よ。王様気取り。それが七人も。迷惑以外の何者でもないわ」

「あ、でも」と、マー・ガレットはスプーンでスープをかき混ぜながら続けた。

「カルペディエムのコルトさん。あの人は違うわね。あの人は後から七の主になつたから、他の六人とはちょっと違うわ。他はもう駄目、元々軍人だったのに、何故か街を仕切り始めて、今じゃ自分達のこと王族か何かと勘違いしているから……街の人達も、何故か七の主と孫には逆らわないし」

「この街は、ちょっとおかしいのよ」。そう言つとマー・ガレットはスープを飲み干し、自分の食器を片付け始めた。

「ママは?」

ユウイはテーブル拭くマー・ガレットに問う。マー・ガレット自身

も、七の主には逆らわない、逆らえないのだろうか。

「……そうね、時と場合によるかしら。波風立てて街の人困らせたくないし。めんどくさい事はごめんだわ」

「するい考え方ね」。テーブルを拭く手を止め、マーガレットが言った。コウイはぶんぶんと首を振り、スープの入ったカップを見つめた。七の主というのは、なんだかとても厄介なものらしい。その孫と友達になれだなんて、やっぱりヨーダは意地悪だ。

「で、ユウイは今日どうするの？ またヨーダ君に遊んでもらうのかしら？」

「えつ？」

一瞬何を言われたのかわからず、ユウイは目をぱちくつさせマーガレットを見た。マーガレットは「口ニコと嬉しそうにユウイを見つめている。

「うん、そう……あそんでもらう、の」

本当なら遊んでもらうなんて口が裂けても言いたくなかったが、これから友達を作るために友達を作らなければいけないなんてこと、よく考えればおかしくて、マーガレットに言つたら怪しまれるだろう。コウイは怪しまれないように笑顔を作りながら、マーガレットにそう言つしかなかつた。

朝食をすませ、マーガレットに見送られながら大通りに出ると、ユウイはポシェットから一枚紙を取り出した。そこには、七人の孫達の名前が書いてあつた。昨日塔から出るとき、ヨーダに書いてもらつたものだつた。

きょろきょろと大通りを見渡し、カルペディエムを見つけると、ユウイは店に向かつておもいきり舌を出した。気が済むまで舌を出し続け、ふん、と鼻を鳴らすと、唇を尖らせ名前の書いてある紙を見つめた。一番上に書いてある、カルエルという名前。その名前だけ、横に地図が書いてあつた。他は全員街の東にある、小さなお城のような建物の中には、ヨーダは言つた。ユウイはまず、地図のあるカルエルという人物の家に向かう事にした。

地図には、大通りの噴水広場を左に曲がると、煉瓦の坂道があり、それを登りきると大きな庭園のあるお屋敷があると描いてあった。ユウイはまず噴水広場に向かい、坂道を登り始めた。

坂道を登っていると、途中甘い香りが鼻先をくすぐった。何の香りかしら？ と辺りを見渡してみると、甘い香りのもとは見つからない。そのまま坂道を登りきると、ユウイの前に、大きな門が立ちはだかつた。

門の前には、大きな槍を持った、大きな体の門番が立っていた。ユウイはおそるおそる門番に近付き、彼を見上げた。門番は微動だにせず、自分にまつたく気がついていないう�に見えた。

「あの、カルエルさんのおうちは、ここですか？」

ユウイはちつとも自分の事を見ない門番にそう尋ねた。門番はユイの問には答えず、ただ真っ直ぐ坂道を見据えていた。

「あの、じょうがあるの、カルエルさん、いますか？」

ユウイはもう一度門番に尋ねた。変わらず、返答は無い。

そこに、ふわりと先程の甘い香りが漂ってきた。ユウイは門の先をみつめ、中の庭園に気がついた。小さな白い花がゆらゆらと風に揺れるたび、甘い香りが届けられる。ユウイはその香りに惹かれ、門に一歩近付いた。すると門番がユウイの前に大きな槍を振り下ろした。

「お嬢様は、体調を崩されお休みになつておられる」

ユウイは驚き、よろけて尻餅をついた。門番が自分に槍を向け見下ろしている。ユウイは慌てて立ち上ると、ペニリと頭を下げて逃げるようになに門を後にした。

「こわいの……もんばんさんこわい……」

坂道を降りながら、ユウイは振り返り門を見た。門番がこちらをじつと見据えている。お尻に付いた砂埃を払い、ユウイは溜め息をつく。もう一度門番のもとにいこうかとも考えていたが、カルエルの具合が本当に悪いのなら、無理に会おうとするのは失礼かもしれないと思つた。

ユウイはざつと握り締めてしわくちゃになった紙を広げ、残りの六人の名前をみつめた。ヨーダはともかくとして、残り五人もいるのだ。きっと自分と友達になってくれる人がいるに違いない。

坂道を降り終え、ユウイは噴水の縁に座り大きく伸びをした。そして目に入った青空を見て、絶対に負けないんだから！ と小さく呟いた。

噴水で一休みした後、ユウイは次に街の東にあるという、小さなお城のような建物に向かった。

その建物までの道程は遠くはなく、大通りを東に真っ直ぐ進めば良いだけだった。ユウイは今まで大通りの東へ行つた事がなかつたので、期待と不安でいっぱいになりながら前へと進んだ。

大通りの東は全くと言つていいほど人通りが無かつた。ユウイは途中、本当にこの道で合つているのか不安になつたが、中程まで来たところで、てつぺんにとんがり帽子をかぶせたような建物の頭が見えたので、それが城だろうと考えそのまま進む事にした。

お城の近くまで来て、ユウイはお城の前の建物の壁際に隠れるようにして立ち止まつた。お城の前には、大きな槍を持つた黒ずくめの人物が二人立つていた。きっとまた門番さんだわ、と、ユウイは壁際に隠れながらどうしようかと悩んだ。普通に行つてもまた追い返されるのでは？ でもこそ隠れて入つたら、どうぼうさんみたいだわ。ユウイは悩んだ結果、勇気を出して門番の元へ向かう事にした。

「あの、しちにんのあるじのおまじさんいますか？」

背の高い門番の足下で、ユウイは門番を見上げ言つた。門番は黒のローブを曰深にかぶつているが、無言でユウイが今通つて来た道を見据えているように見えた。

「あの、『ようがあるの。おまじさんたち、ここにいますか？』

ユウイが再び問うと、向かつて右側の門番がローブの下から少しだけ覗く口許を少しだけ動かした。

「お会いするには許可がいる。許可証はあるか
「きよか、しよう？」

ユウイは唇を尖らせ、首を傾げて門番を見上げた。そんな話、ヨーダから聞いていない。ユウイが焦っていると、無いのなら帰れと黒ずくめの門番は槍でユウイの来た道を指し示した。

「あの、まつて、きよかしょ、だれにもらえばいいですか？」

「主、またはお嬢様方のサインが必要。それ以外は認められていな
い」

そう言つて門番は再び無言で大通りを見据えた。

お城に入るには、サインが必要。

サインが必要な相手は、お城の中にいる。

ユウイはなぞなぞのよつなこの状況に、困り果て小さなお城を見
上げた。

+

「で、どうすることもできないで、ここに来たわけか」

カルペディエムのレジの前で、ヨーダが何やら裁縫をしながら言
つた。

「だつて、きよかがいるなんて、きいてないわ！　どうにうことな
のよ！」

店内にあるテーブルで、昼食に買つた白パンを頬張りながら、ユ
ウイはヨーダに抗議した。

小さなお城の前で、ユウイは許可がなくてもどうにかならないの

かと門番に尋ねたが、門番はユウイの話を聞いているのかいないのか大通りを見据えているばかりで何も答えてはくれなかつた。その後城の中から七人の主か孫の誰かが出てこないか待ち続けてみたもの、何時間待つても城からは誰も出でてはこず、途方に暮れているところでおなかが鳴り、カルペティエムにやつってきたというわけだつた。

「どういうわけもなにも、てっきりマーガレットに聞いてると思つたから。俺何も訊かれてないし」

「むつかーーー！」

ユウイはパンを購入した時にヨーダに入れでもらつた紅茶を勢いよく飲み干した。そして白パンの最後の一口を頬張り飲み込むと、すんずんとレジの前に行き、無言で紅茶のカップをヨーダに返した。

「帰るのか鼻たれ。昼飯食いに来ただけじゃないんだろ」

すんずんと店のドアの前まで歩いて行き、ドアノブに手を掛けたところでヨーダに呼び止められる。ユウイは頬を膨らませたまま振り向き、ヨーダを睨んだ。

「残念だけど、俺許可出さないよ。あいつとおまえが友達になるの反対だから」

ヨーダは裁縫の手を止めず、睨み付けるユウイの方をちらりとも見ないでそういった。ユウイはまったく相手にされていないことに腹を立て、抗議の顔を見せようとすんずんレジの前まで歩いて行き、ふとヨーダの手元を見て止まつた。

「それ、だれの？」

ヨーダの手元には、白の生地に色とりどりのビーズがちりばめられた服があつた。袖には今ヨーダが縫い付けたレースが揺れている。あまり見掛けない服の形に、ユウイは首を傾げヨーダに問うた。

「元々俺の父親の服。で、今はカナの」

ヨーダは大きく伸びをすると、レジのカウンターの上にその服を置いた。ヨーダのお父さんの、ということは、アルト民族の衣装ということだらうか。きっとそれを女の子用にしているのね。きらき

ら光るビーズと真っ白なレースがとても綺麗で、さつとカナタによく似合つだつとコウイは思つた。

「そろそろ諦める気になつただろ。普通に友達作つた方がいいだろ」「カウンターに肘をつき、ヨーダがコウイを見下ろした。コウイも負けじと背伸びをして、頬を膨らませヨーダを睨んだ。

「カナタは、きょうはどこにいるの？」

「どこつて、塔だろ」

「ほんとに？ このおみせにはこないの？」

「来ないよ。街には来ない。来れないんだよ」

「来れない？ 来れないとは、どういうことだろ。」

コウイがそれを問う前に、ヨーダが口を開いた。

「あいつは嫌われてんだ。街の嫌われ者。だから街の外れに追いやられている。あいつは路地を抜けられないし、街の住人も路地を抜けられない。そういう風にできてんだ。なのに」

「おまえは何故かあの路地裏を抜けてしまったんだ」と、ヨーダは不思議そうにコウイの顔を見て、コウイの鼻を人差し指でついた。コウイはまたふうっと頬を膨らませて、ヨーダを睨む。

「きらわれているつて、どういうこと？ あんなにかわいくて、しろくてきらきらして、おひめさまみたいなのに」

「……女つて好きだよなあ……ああいつの」

呆れたように溜め息を落とすヨーダに、コウイは恥ずかしくなり顔を赤く染めた。

「なによ、じぶんだつて、めんくいさんなんじゃない？ きらわれてるだなんて、ほんとうはひとりじめしたくていつてるんでしょ？ じぶんだけなかよくしてているなんて、するいとおもうの」

ちょっとした反撃とばかりに、コウイは早口でヨーダに言った。

それを聞いたヨーダが、くつくつと笑い出す。コウイはさらに顔を赤くさせ、続けた。

「おとこなんてこどもだから、こどもよつこどもつぱことするけど、おとこのよくぱりとひとつじめはよくなつて、ママがいつて

たわ！」

そういうて人差し指をヨーダに向けて反撃するコウイを見て、ヨーダはコウイから顔を背けさらに笑い続けた。

「あのや、おまえの母親は、おまえに教えることだいぶ間違えていると思つよ」

「なんで？」

コウイは顔を赤くさせたまま、腕を組み首を傾げた。そこでまたヨーダが耐えきれないほどばかりに吹き出し笑つた。

「めんくいはあそびにんなのよー、ながくはつづかないのよー！」

コウイは何故ヨーダがそこまで笑うのか理解出来ず、自分の顔が恥ずかしさからどんどん赤くなつていくのを感じたが、勢いでどんどん言葉が飛び出してしまい、正直自分でも何を言つてはいるのか分からなくなつてしまつていた。

「なによー、そんなにわらうことないじやない！ しつれいだわ！」

コウイはこれ以上無いくらい赤くした顔でヨーダに抗議した。「こんなにはりのたつことははじめてなのよー」と、唇を噛み締めてヨーダを睨む。それを見てさらに軽快に笑い出したヨーダが、呼吸を乱してコウイに言つた。

「あのや、顔がどうとかいう前に、あいつ、男だから」

コウイの動きが、まるで時間が止まつたかのように、ぴたりと止まつた。

「多分間違えてると思つたけど……」

笑い続けていたヨーダが、呼吸を整えてコウイを見た。コウイは身動き一つ取らずに、まるで石のように固まつてしまつた。

「まああの姿だし、間違えない方がおかしいのかもしれないけど……聞いてるか？」

呼び掛けに無反応なコウイをみかねたのか、ヨーダがコウイの顔の前で魔法を解くように手拍子を打つた。硬直していたコウイはぱちぱちと瞬きをしてヨーダを見た。

「うそでしょーうー」

「ああ、嘘かも。俺嘘つきだから」

「だつて、そのおふくろ、カナタのだつていつたじやない！」

ユウイはレジの上に置かれた服を指差しヨーダに言つた。真つ白なレースと色とりどりのビーズ。どうみても女の子のものにしか見えない。

「カナのだよ。あいつ自分の容姿に関してまったく気にする様子無いし、男物より似合うから……」

ヨーダはそこまで言つと、口元を手で押さえ、吹き出すように笑い出した。今の話が本当なら、この悪魔はカナタまでからかつて遊んでいるのか。だけど、カナタは本当に男の子なのだろうか？ そつちが嘘で、からかわれてるのは自分？ ユウイは混乱して頭から湯気が出しあつた。

「どつち！？ 結局どつちなの！？」

「さあな。頑張つて自分で確かめるよ」

「そうね……つて、ばあいによつてはたしかめられないわ……」

「……普通に本人に聞けばいいだる。何考えてんだお前」

「……やらしい」。いつのまにか笑いを抑えて平然としているヨーダが、冷ややかな視線をユウイに向けていた。絶対からかわれてる！ ユウイは恥ずかしさと怒りで顔を真っ赤にさせながら、店を後にした。

本当に本当に意地悪だわ！ 頬をめいといっぱい膨らませ、ユウイは再び大通りを歩き始めた。

主の孫に会うには、許可証が必要。カナタが女の子なのか男の子なのかはこの際置いておいて、ユウイは許可証を手に入れる方法を考えてみた。いや、それより今日一日お城の前で孫達の誰かが出来ることの待つべきだろうか？

ユウイはまた首を傾げ、体を斜めにする状態で考え続けた。するとそこに弾けるような笑い声が聞こえ、ユウイは慌てて近くの建物の影に逃げるよに隠れた。

通りを挟んだ向こう側で、数人の子供達が楽しそうに笑い、通り過ぎて行く。それを建物の影から眺めていたユウイは、子供達の姿が見えなくなるのを確認すると、ほっと溜め息をついてその場に座り込んだ。

（みつかつたら、きっとまたわらわれるのよ）

自分は変な子。面倒くさい子。そう思われている。そう考えるとユウイはどうしても街の子供達と友達になる気にはなれなかつた。でも、今は別にそれでも良いのだ。これからカナタと友達になるのだから。カナタと友達になつて、あんな風に笑つてお喋りして、楽しく遊ぶんだから。今頑張れば、これからきっと楽しい毎日がやつてくる。

けれど、何故だか胸の奥がむずむずとする。

ユウイはその場に座り込んだまま、建物の隙間から空を見上げた。流れしていく雲を眺めていると、一羽の白い鳥が飛んでいくのが見えた。それを追うように、一羽のカラスが飛んでいく。ぼんやりとそれを見ていたユウイは、ふと我に返り立ち上がる。

「あれ、もしかして……？」

広大な砂漠のくぼみで見た、あの白い翼。ユウイは慌てて翼を追い、路地裏へと足を進めた。

路地を入つてしまはらくすると、ユウイはまた帰り道が分からなくなるのではと後ろを振り返つた。足踏みしながらその場で一回転し、でもこのまま帰れないわ！ と再び足を進める。もしかすると、またカナタに会えるかも知れない。

路地に入つて四つ目の角を曲がつたところだつた。上空で白い翼はカラスに追いつかれ、突かれ、羽を巻られて落ちていく。ユウイはそれを受け止めようと走り、両手を掲げ滑るように転んだ。そこへ翼が旋回しながら弱々しく落ちてくる。ユウイは擦りむいた膝の痛みに耐えながら、めいいっぱい両手を伸ばし、翼を手のひらに受け止めた。

ふわふわの感触を手に感じて、ユウイはそつと手のひらを覗いた。

ふわふわだけど、ぼろぼろになつたそれは、たしかにあの時見た翼だつた。

翼はコウイの手のひらで小さく震えると、弾けるように光を上げ黄金色の一枚の羽根になつてしまつた。コウイは羽根を手のひらに乗せたまま、おおおおとしながら立ち上がつた。

辺りを見渡して、手のひらのそれを見る。綺麗な黄金色の一枚の羽根は、どこへ向かおうとしていたのだらう。

「どどけなきや、だめかしり……」

けれど、コウイはカナタのいる風の塔への道を知らない。これ以上路地裏に入つてしまつと、また迷子になつてしまつかもしれない。叱られるかもしれない。

その時だつた。路地裏の奥から、ガシャリ、ガシャリと物音が聞こえて來た。この音は、前にも路地裏で聞いた音だ。コウイは慌てて一枚の羽根をポシェットにしまい、来た道を引き返していった。

路地裏を抜け、再び大通りに出た。後ろを振り向き、何も無い事を確認すると、ほつと息を吐いた。一体あの音は何だらう？ やつぱりおばけかしらと、コウイは想像し、その身を震わせた。

大通りを歩き始めると、気がつけば再びカルペディエムの前まで來ていた。ポシェットの中の一枚の羽根は、ヨーダに預けるべきだろうか？ コウイはお店の前を行つたり来たりしながら考え、それからそつとお店の中を覗いた。すると、レジの前にヨーダの姿は無く、そこにいたのは白髪のおじいさんだつた。

白髪のおじいさんはコウイに気がつくと、のんびり椅子から立上がり、こちらに向かつて歩き始めた。コウイはその場で身を隠すようになつたが、おじいさんからコウイの姿は丸見えだつたようだ、ショーウィンドウの中からコウイに手招きするのだつた。

コウイはおずおずと店の扉を開け、中へと入つた。きょろきょろと店の中を見渡しても、やはりヨーダの姿は無かつた。

「ヨーダならおらんよ。どうしたね？」

おじいさんは白髪を撫で付けながらコウイに問うた。コウイはも

じもじと下を向き、何と答えたら良いのか考えていた。」のおじいさんは果して、優しいおじいさんだろうか。それとも恐ろしいおじいさんだろうか。見た目は優しいおじいさんだけれども、もしも中身が恐ろしいおじいさんだとすると、さつきも路地裏に入った事が分かれば、きっと叱られるに違いない。

コウイが何も答えられずに下を向いていると、おじいさんは「ほつほつ」と一言だけいい、そうして大きく笑い始めた。

「そうか、そうか。あれじゃな、あの悪ガキに、わしの事を恐ろしいじいさんとでも吹き込まれたんじゃな？ なあに、とつて食いやしない。おまえさんはコウイだらう？」

コウイは慌てて首を振り、それから頷いた。慌てふためくコウイの姿を見て、おじいさんはまた「ほつほつほ」と笑い、コウイを店の奥へと手招きした。

「おまえさんのことは、つちの悪ガキから聞いてあるよ。路地裏を抜けて、力ナに合つた」

おじいさんは店のレジの引き出しを探り、太いマジックを取り出した。それからもう一度引き出しの中を探り、困つたように頭を搔いた。

「七人の主も孫も、キュリカ……あの城からは出でこんよ。合えるのはうちの悪ガキか、わし。運が良ければカルエルじゃなあ」

引き出しを引張り出して、おじいさんはそれを抱えるようじて、「ごそと中を探りながらコウイに言つた。それから「な」の「」……」と頭を搔いてコウイの顔を見た。

「カルエルには会えんかつたじやろ？ あの子はこのどこの具合が悪くて外には出られんのじやよ。わしも今からキュリカで仕事じや。しばらく帰つてはこれない。ヨーダの意地悪は許可を出さなかつたじやろ？ まつたくもつて意地悪じやのう」

おじいさんは溜め息をついて、それから思い出したように自分のポケットを探つた。そしてポケットから一枚の白いハンカチを取り出すと、再びコウイに手招きをした。

「意地悪だけど、とても詰めの甘い意地悪じゃ。運が良ければすべて片の付く、甘い意地悪じやのう」

手招きされたユウイがレジの皿を覗き込むと、おじいさんは白いハンカチに何かを書き始めた。ユウイはびうじていいかわからず黙つてそれを見ていた。

「おそらくはカルエルなら友人になつてくれる。カルエルがだめならわしが許可を出すだろうと見越しての意地悪じや。どちらも運が良ければ出来る事。そしてお嬢ちゃんは運が良かつた」

そう言つておじいさんはユウイにハンカチを渡した。そして「わたしの名前はコルト・クレスケントじや。お見知りおきを、小さなレディさん」というと、小さく会釈をした。そしてハンカチには、今紹介のあつたおじいさんの名前が記されていた。

「さて、それを持って行けば、キュリカの中には入れるぞ。本当は許可証用の紙があつたはずなんだかの、それでもまあ大丈夫じやろ」

「うう言つてコルトはまた笑つた。ユウイは許可証がここで手に入るとは思つてもみなかつたので、どうしていいかわからずハンカチを握り締めながらただその場に立ち尽くしていた。

「どうしたね？ わしの許可証じや不安かね？」

不思議そうに首をかしげるコルトに、ユウイは慌てて首を振つた。

「あの、どうして、きょかしょ」

「わしは可愛くて運の強い子が好きじや。それから……」

コルトはレジから一番近いテーブルにのんびり歩いて行き、皿一枚手に取ると、振り返りその皿をユウイに見せた。皿の上には小さな二ンジンが二つ、申し訳なさそうに乗つていた。

「あやつめ、わしの今日のランチに二ンジンを仕込みおつた。いや、わしは別に二ンジンが嫌いなわけではないんじやよ。ただちょっと今日は二ンジンの気分ではなかつた」

コルトは難しい顔をして皿をテーブルに戻すと、ふわふわの白髪を撫で付け、

「ヨーダの意地悪に、今日はちょっとばかし仕返しをしてもいいや」と仲間が欲しかったんじゃ

とコウイに言つた。コウイはコルトが小さな子供のよう見えて、

思わず笑つてしまつた。

「どうでレーティさん、本当に、カナの友達になつてくれるのかね？」

ぐすくすと笑つてゐると、コルトがコウイにさう問つた。コウイはコルトに大きく頷いて見せた。

「そうかそうか。でものう、あの子と友達になるところとは、とても難しいことじゃよ。友達になつても、そのことは誰にも言えんし、誰かに見つかってわし以外の老いぼれ六人に報告されたら、お嬢ちゃんは街から追い出される。普通の子のようには遊べんよ？」

「あの、その……なぜカナタはあのとうにいるの？ なぜまちでそんじやあいけないの？ ヨーダが、カナタはきらわれてるつてつてたわ。どうして？」

コウイはずつと感じていた疑問をコルトに訊いた。コルトはしばらく考え込むようなしぐさを見せて、それから言つた。

「色々事情があるんじゃよ。一つだけ言えることは、風使いがこの世界に一人、あの子しかいないことにある」

コルトはテーブルの椅子に座ると、ふう、と溜め息を付き、続けた。

「街はあの子を守つてると言つとるがの、希少価値が高いから、色々なことに利用出来る。だから逃げられないように捕まえとく。それだけのこと。守るどころか、大人の事情に巻き込まれて、閉じ込められて、ひとりぼっちじゃよ、あの子は」

コルトはそう言つと、また溜め息を付いた。コウイには大人の事情と言つものがわからなかつたが、ひとりぼっちでの塔に閉じ込められているカナタの事を考へると、可哀相でならなかつた。

「でも、どうしてきらわれてるの？ なにも、わるいことなんてしてないんでしょう？」

「悪いこと、悪いこととかね…… そういうの……」

コルトはそう呟くと、俯き、遠くを見るよつたで続けた。

「悪いことか、良いことか、わしは今でも分からんよ…… そういうの、気になるなら、本人に訊きなさい。わしの口からは上手く言えんの」

ぽんやりと、一人、とのよつてコルトは言った。コウイはコルトがなぜ教えてくれないのかわからなかつたが、黙つてそれを訊いていた。

「やはりとても難しこことじや。それでも友達になりたいのかの？」

コルトの表情は穏やかだつた。けれどその瞳は真剣だつた。わからぬことが沢山ある。カナタは物語のような囚われのお姫様ではないように感じた。けれど、コウイの気持ちは変わらなかつた。

「わたし、やつぱり、カナタとおともだちになりたいわ。ひとりぼつちは、さみしいもの」

コウイがそう言つて、コルトは「せつか、そつか」と笑い、白髪を撫で付け、言つた。

「やうじやの。ひとりぼつあはせみし。お嬢ちゃんはそれをよくわかつていて。お嬢ちゃんなら、きつといつてお友達になるじやうつなあ」

コルトは立ち上がると、のんびりコウイの元まで歩き、コウイの頭を撫でた。撫でられた頭がぽかぽかする。コウイは頭に両手を乗せ、このおじいさんは恐ろしいおじいさんではないわと確信した。

「さあて、申し訳ないんじやがの、わしはそろそろ出かけねばならん。お嬢ちゃんも、そろそろ帰らねばならん時間じやうつ。キュリ力に行くなら明日にした方がいい。今日はの、これからキュリ力で孫もじじいもつまらん顔付き合わせながらの会議なんじや。また追い返されてもつまらんじやうつ

「あの、まつて！ これを……」

コウイは慌ててポケットを探り、一枚の羽根を取り出すと、コルトの前に差し出した。

「あの、これ、さつきひろつたの……カナタのでしょ」

「おお、願い羽根じゃな？」

「ねがいばね？」とユウイは首をかしげながらコルトに訊いた。

コルトは目を見開いて、物珍しそうにユウイの手の中の羽根を見つめていた。

「これは、別名グノーシスの羽根といって、とても貴重なものなんじやよ。これをどこで見つけたね？」

「あの……」「めんなさい。ろじううで、カラスにあそわれていたの」

「カラス？ するとミシユルの仕業じゃな……」

コルトは眉間にしわを寄せ、腕を組んで「つむむ」と唸った。ユウイは再び路地裏に入つたことを叱られると思っていた。しかしコルトはユウイの顔を見ると、叱るどころか「コニコニと微笑みかけてきた。

「その羽根はのう、役割を終えるまで翼から元の一枚羽根には戻らないんじやよ。つまり、お嬢ちゃんに用があつて飛んで来たんじやなあ」

「わたしに？」

「そうじや。願い羽根は人の願いを運ぶ。おそらくカナがお嬢ちゃんを心配して飛ばしてきたのじやろうなあ」

コルトは「しうがないのう」と頭を搔きながら言つと、嬉しそうに笑つた。

「それはお嬢ちゃんから返してやりなさい。その方があの子も喜ぶ」「あの、かえすつて、どうやって？ カナタにあつていいの？」

「いや、会わなくとも返せるんじや。カナはお前さんに宛てて羽根を飛ばした。次に羽根を飛ばすことが出来るのはお嬢ちゃんだけじやよ。そういう決まりじや」

「きまり？」

「そう、受取人しか飛ばせない。なあに、簡単なこと。その羽根を両手で包んで、伝えたいことを頭で考える。すると羽根は翼に変わつてカナの元に飛んで行くよ」

「コウイは言われるまま両手で一枚の羽根を包み、カナタに伝えたことを考えてみた。何を伝えるのが良いだろう。今日は色々な事があつた。ヨーダは相変わらず意地悪。おじいちゃんは優しい人で、門番さんは怖かった。カナタは今日何をしたかな？ 伝えたいたい事が沢山ある。

「コウイが何を伝えようか迷つていて、コルトはそんなコウイを見て楽しそうに笑つた。

「伝えたいことが沢山あるようじゅうじゅう。どうじゅう、うちに帰つてゆっくり考えてみては？ 急がずともそれくらいは待つてくれるじやろ」

「コウイが大きく頷くと、コルトは大きく「ほほほほ」と笑つた。その姿を見て、やっぱりヨーダのおじいちゃんは季節外れのサンタクロースさんみみたいだわとコウイは思つた。

「ありがとう、おじいちゃん」

店のドアの前でコウイがお辞儀をすると、コルトは白髪を撫で付け、会釈をした。

「なあに、礼はいらんよ。またおいで。小さなレディさん」

コウイは外に出た後もガラス越しに大きく手を振り、カルペディエムを後にして。

許可証と一枚の羽根を握りしめながら、コウイは帰路を走り出した。家に帰つたら、まず何をカナタに伝えよう。まずは許可証が手に入つたことを教えてあげなくちゃ。そうして明日はキュリカに行つて、主の孫とお友達になつて、そしたらカナタともお友達になれるんだよつて、また会えるよつて伝えなくちゃ。

楽しいことばかりが頭に浮かんで、息が弾んだ。明日からは楽しい毎日が待つてゐるんだわ。今まではちょっとボタンを掛け違えていただけ。今ようやくボタンが正しくかけられたのねと、コウイは握りしめた許可証を確認し、うふふと小さく笑つた。

息を切らせ家の前の角を曲がると、うちの前にマーガレットの後ろ姿があつた。コウイはポシェットに一枚の羽根と許可証をしまう

と、マー・ガレットのもとへと走った。

ママ、と声をかけようとしたところで、マー・ガレットが振り向いた。マー・ガレットはそばに置いてあつた簞を取り、ぐるりと柄を下にして地面を叩いた。ユウイの動きがぴたりと止まる。女王様だ……！　杖を武器に持つた女王様がここにいる！！　ユウイは何故女王マー・ガレットが怒っているのかわからず、その場に立ち尽くした。

「どういうことか、説明しなさい。あなた、キュリカの前で何をしていたの？」

ユウイの心臓が、大きく脈打った。なんでママがキュリカにいたことを知っているのだろう。ユウイはなんて答えたらいのかわからず、マー・ガレットからゆつくり目をそらし、地面を見つめた。

「あなたがキュリカの前をうろちょろしているのを、街の人たちが見ていたの。あそこに一体、何の用があつたというの？　あそこは子供の遊び場じゃないわ」

落ち着いているけれど、その声の中には厳しさが滲んでいる。ユウイの背中に汗が伝う。街の人を見ているなんて気にも留めていかつた。何か言わなくちゃ。ユウイはしじろもどりになりながらマー・ガレットに言い訳を考えた。考えながら、また嘘をつかなくてはいけないのかと罪悪感にとらわれた。今また嘘をつくと、その嘘をずっと守らなくてはいけないことになる。嘘つきでいることは、胸がもやもやして嫌だつた。

結局何も言えず下を向くユウイを見下ろしていたマー・ガレットが、大きくため息をついた。

「いいわ。ママもきちんと注意しなかったものね。あのね、キュリカは七の主が集まるところなの。街の人たちは基本的にあの場所には近づいてはいけないことになっているのよ。あなたがキュリカの前で何をしていたのかは知らないけれど、もつあそこには近づいちや駄目よ。路地裏と一緒に

「わかった？」と、マー・ガレットはユウイに問う。ユウイは頷こ

うとして、ぴたりと止まった。ここで頷いたら、キュリカに行けなくなる。カナタと友達になりたい。明日もキュリカに行きたい。頷いたら、嘘つきになる。嘘つきの友達って、カナタは嫌じやないかしら。嘘ついて友達を作るので、何かおかしくないかしら。

「コウイは無言のままマー・ガレットの横を通り過ぎようとした。頭がこんがらがつて湯気が出しちゃうだった。そこへ、マー・ガレットの自分の呼ぶ声が飛んできた。

「コウイ、言うことが分からぬのなら、明日から外には出さないわよ。しばらく遊びに行くのは禁止だわ」

コウイはその言葉に驚き、振り向いた。マー・ガレットは腕を組み、コウイを見据える。

「あのね、朝も言つたでしょ？ 七の主にかかると面倒なことになるの。この街にいられなくなるのよ？ わかつてゐるの？」

「このまちにかつてにつれてきたのは、ママじゃない！？」

コウイの中で、何かが弾けた。せっかく上手くいくと思つていたことが阻まれた。そのことが悲しくて、今までの不満が口をついて出ていく。

「ママはかつてなのよ！ パパのこともなにもおしえてくれないし、わたし、すきでママについてきてない！ おばあちゃんにだつて、ほんとうは会いたいの！」

「ひとつまつちは、もういやだわ！ ママなんてだいきらい！」

「！」そうマーテガレットに向かつて叫ぶと、ぽたぽたと涙があふれ出てきた。今まで我慢していたものが噴出してしまった。コウイはそのまま家中に入ると、さうに胸の奥にもやがかかるつていいくを感じながら部屋へと戻った。

部屋の扉を開けると、コウイはそのままベッドに倒れ込むようこ寝ころんだ。ずす、と鼻水をすり、枕に顔を埋めると、さうに涙が溢れ出ってきた。こんなこと、望んでいたわけじゃないのに。ただ普通にお友達を作つて、普通に遊びたいだけだったのに。どうして上手くいかないのだろう。

ふと窓際にある小さな机の上に目をやると、木製フレームの写真立てが目に入った。中の写真はここへ引っ越してきたとき仕舞つてしまつた。クレスと祖母が写つていたから、なんとなく飾つておるのはマーガレットに悪い気がしたからだつた。

明日から、どうしよう。ユウイはぼんやりと空の写真立てを見つめながら、これから事を考えた。マーガレットは、キュリカに行くなら遊びに行かせないと言つていた。でも、キュリカに行かねば、主の孫と友達にならねばカナタとは友達になれない。ただ街に出たつて、自分は一人ぼっちだつた。

ユウイは寝ころんだまま、着けたままだつたボショットの中身をすべてベッドの上へと出した。ハンカチや飴玉に混じつて出来た許可証と一枚の羽根が、なんだか色あせたように見えた。

そうだ、カナタに返さなきやいけないんだつた。一枚の羽根を握りしめて、ユウイはベッドから起き上がり部屋の窓を開けた。もう日は暮れていて、まあるい月が夜空にぽつかりと浮いていた。

羽根を握りしめて、ユウイはカナタに何を伝えようか考えた。けれど頭の中はぐちゃぐちゃで、考えが一向にまとまらなかつた。どうどろとした感情だけが、握りしめた手から羽根に伝わりそうで、ユウイは小さくため息をつくと羽根を握る手を緩めた。

その時、一枚の羽根が小さく震えた。そして瞬く間に部屋いっぱいに金色の光が広がつていぐ。驚いたユウイが一枚の羽根から手を放すと、羽根は回転して一对の翼へと変化したのだった。

金色の光を放ちながら、翼はユウイの頭上を旋回し、しばらくするとぽとりと力なくベッドの上へと落ちた。ユウイが恐る恐る翼に近づき人差し指でつづくと、再びふわりと浮きあがり、また力なくベッドの上に落ちた。

ユウイはしばらくベッドの上の翼を見ていたが、ああ、と手のひらを拳で打ち、きょろきょろと部屋の中を見回した。

「あなた、もしかして、おなかがすいているんじやあ……？」

ユウイがベッドの上の飴を取り、包装紙を剥いて翼の前に差

し出すと、翼は嬉しそうにコウイの手のひらの上に乗り飴を両翼で包み込んだ。一瞬、翼の輝きが金色から飴の色のピンクに変化して、元に戻った。翼がコウイの手のひらからゅっくりと浮き上ると、そこにあつたはずの飴は跡形もなく消えていた。

コウイが手のひらを見つめていると、翼がコウイの前を飛び、そのまま窓の方へと向かつて羽ばたいた。そして窓の前でコウイの方へ振り向くと小さく震え、ぱたぱたと翼を羽ばたかせた。すると翼から小さな星形のガラスが一つ、また一つと転がり落ちて、小さな輝きを見せるのだった。

しゃがみ込んで星形のガラスを拾い、コウイが窓を見上げると、翼は月に向かつて飛び立つてしまつた。ああ、まだ何も伝えたいことを教えていないのに。窓から身を乗り出して翼を見送ると、コウイは手にしたガラスを月明かりに照らした。

+

翼がユウイの元を発つてから、三田が経つた。その間ユウイはマーガレットと一緒にも口を利かなかつたし、なるべく顔を合わせないように部屋から殆ど出なかつた。

三田の朝、マーガレットが仕事に出かけたのを見計らい、部屋から出て台所に向かつた。久しぶりに作った田玉焼きは自分の気持ちと同じで、黄身がつぶれてぐしゃぐしゃだつた。それを見たユウイの顔もまたぐしゃぐしゃになつた。もうどうすればいいのかわからない。マーガレットも自分にまつたく声を掛けないし、きっともうママはわたしのことなんてどうでもよくなつたんだと、ぐしゃぐしゃの田玉焼きをつつきながらコウイは思った。

朝食を食べ終え、食器を洗っていると、外から子供たちはしゃぐ声が聞こえてきた。コウイは一時皿を洗う手を止めたが、何も聞こえないふりをして皿洗いを続けた。

皿洗いを終え椅子に座ると、テーブルの上に置かれていた新聞を手に取り広げてみる。日付は三日前の物だった。コウイは広げた新聞が穴だらけなのを見て、そういえば前にママが「新聞は主達が自分たちに都合の悪いことを全部切り取つてから配られる」と言つていたのを思い出した。だから三日も経つてからポストに投函されることなんて珍しくなかつた。

虫食い新聞を覗き込んで、コウイはため息をついた。そもそも新聞なんて難しくて読めないんだもの、いつそのこと全部切り取つてしまつてもいいことコウイは思つた。

滑り落ちるように椅子から降りると、コウイは部屋に戻ろうとのろのろ歩き始めた。するとまたコウイの耳に子供たちの遊ぶ声が入ってきた。コウイはしばらくその場で立ち竦み、子供たちの声が遠くなつていいくのを聞いていた。また胸の奥がムズムズとする。遠くなつた声をなんとなく確認したくなり、そつと台所の窓を開けた。恐る恐る外を覗き込むと、そこにはもう誰もいなかつた。

ふう、とため息をついて、窓を閉めようと手を伸ばすと、ふわりと優しい風が吹く。手を止め再び窓の外を覗き込むと、その瞬間突風が吹きこみ、驚いているコウイの頭上に白い何かが飛び込んできた。尻餅をついて、コウイが頭上を見上げると、白い翼が旋回していた。カナタの願い羽根だわ！ とコウイは慌てて立ち上がり翼を受け止めようと両の手を前に差し出した。

翼をよく見ると、何か袋のよつなものをぶら下げているようだつた。ゆっくりと降りてくる翼を手のひらに受け止めると、翼は袋を残し金色の光を放ちながら一枚の羽根に戻つてしまつた。

翼が一枚の羽根に戻つた瞬間、袋はずしりと重くなつた。コウイは緊張した面持ちで袋の中を確認しようと紐を解く。中には蝶の細工が施してある白い望遠鏡のよつなものが入つていた。

ユウイが首を傾げ、その望遠鏡の穴を除いてみると、外は全く見えなかつた。ただ白い世界だけがそこにはある。ユウイは唇を尖らせ、体を斜めにして考えたが、これが一体何なのか全くわからなかつた。他には何か入つていなかしらと、今度は袋の方を覗き込んだ。すると小さく折りたたまれた紙が一枚袋の底に入つていてのを見つかけた。

? 筒の底は蓋になつています。左に回して開けたら、願い羽根が落としていつたガラスを入れて、蓋を閉めたら穴を覗いてごらん? 紙には小さくそう書かれていた。ユウイは説明の通りに蓋を開き、部屋に置いてあつた星形のガラスを筒の中に入れた。そうして穴から筒の中を覗き込むと、わあつと声を上げ筒を回転させた。

カレイドスコープだわ。ユウイは筒を覗きこみ回転させながら近くにあつた椅子に座つた。回転させるたびキラキラと不思議な模様を描き出すそれを見ていたら、殺風景な部屋がまるでおとぎの国のようつに感じられて楽しかつた。空、海、大地、お城のシャンデリア、魔法の国。これはきっとお姫様のイヤリング。ユウイは時間を忘れて筒の中を覗き込んだ。

しばらくカレイドスコープを楽しんでいると、家の前を子供の声が通り過ぎた。それで夢の世界から現実に戻されてしまつたユウイは、ため息をついて再び折りたたまれた紙を広げ見た。するとカレイドスコープの説明のほかにも、小さな文字で何か書かれているのを見つかけた。

? 幾重にも折り重なつてている世界には、幾つもの道があります。どうか本当に進むべき道を見失わないでいて?

小さいけれど、とても丁寧な字で書かれているその言葉を、ユウイはカレイドスコープを握りしめ、子供たちが外で放つ弾けるような声を聽きながら、何度も繰り返し読み返した。胸の奥のもやもやが、少しづつ晴れていくのを感じながら。

次の日の朝、ユウイはマーガレットが出かけるのを見計らつて起

き、着替えてポシェットを肩に下げる。家の外に誰もいないことを確認しながら扉を開け外に出た。そうしてゆっくり深呼吸をすると、よし、と小さく呟いて大通りに向かい歩き始めた。

早足になるにつれて、自分の心音も早くなつていいくのを感じた。街の人々とすれ違つたび呼吸が弾む。朝の陽ざしがいつもより眩しかつた。

大通りに出ると、ユウイはカルペディムの前で立ち止まり、店の中を覗き込んだ。するとユウイの姿に気が付いたコルトが手を振り、ユウイもそれに応えるため大きく手を振つた。それから噴水広場まで行くと、噴水の前のベンチに座りポシェットの中を探つた。ポシェットから取り出した小さな手のひらには、ガラスの星屑があつた。それをぎゅっと握りしめて、ユウイは噴水横の時計台を見た。

ベンチに座つて一時間が過ぎたころ、噴水前に集まつた鳩をぼんやりと見ていたユウイの耳に子供達の声が入つた。ユウイはするりとベンチから降りて声のした方を見やる。視線の先には五人の少年と少女がいた。

ユウイは大きく深呼吸をして、楽しそうにお喋りをするその五人の前に立つた。初めに少女の一人がユウイに気づき、立ち止まると、他の四人も立ち止まり、ユウイを見た。

「あの……、わたし」

ユウイが口を開くと、大柄な少年が笑つた。

「なんだよ、何か用？ ていうか、お前喋れたの？」

大柄な少年はユウイに向かつてそういうと、他の子供たちを誘うよづ、からかうように笑つた。ユウイの表情が強張る。最初にユウイに気が付いた少女が、ぼさぼさの髪を手で押さえながら諫めるようになつて大柄な少年の腕を小突いた。

「ねえ、私たちに何か用？ これからみんなで何して遊ぼうか話していきたところなの。君も」

「やめとけよ！ こいつ喋んないし、すっげえめんどくさいんだぜ。」

すぐ泣くしやあ！」

「そりそり。こんなやついたらつまんねーよ」

「こいつ、何か月か前に引つ越してきたあの変な子だろ？ やめとけやめとけ！」

少女の声を遮るように、少年達が口々にユウイを馬鹿にした。ユウイが緊張から声も出せず立ち竦んでいる横を、子供たちが通り過ぎていく。ユウイに話しかけたぼさぼさ頭の少女も、ユウイを気にしながら他の子らについて行ってしまった。

ユウイの瞳に涙が滲んだ。ぎゅっと拳を握ると、手のひらの星屑が痛かった。ユウイは手のひらを見つめ、もう一度固く握りしめると、その手で涙を拭つて振り返り走り始めた。

楽しそうな子供たちの横を走り抜け、振り向いて止まる、ユウイは大きく息を吸つて叫ぶように言った。

「わたしもいつしょにあそびたいの！ なまにいれて！」

噴水前の鳩が一斉に飛び立つた。ユウイは肩で息をしながら、あつけにとられる子供たちの顔を見据えた。

「なんだよ……なんなんだよこいつ……」

大柄な少年が、一步引いてユウイを見た。他の子供たちもユウイの勢いに押されて後ずさつた。そんな中、やはりぼさぼさ頭の少女がユウイの前に立ち、ユウイの身長に合わせるように屈み笑顔を見せた。

「いいよ。一緒に遊ぼう。何して遊ぶ？ 缶蹴りとか知ってる？ 鬼ごっこ、好き？」

「おい！ 勝手に……」

大柄な少年が少女の肩をつかみ止めに入つた。少女はその手を払うと、大柄少年の鼻を突いた。

「いいじゃない。この子、面白いよ。ねえ、名前、なんていうの？」
ぼさぼさ頭の少女が、ユウイに問うた。握りしめていた手のひらの中、星屑が光る。まるでカナタが優しく背中を押してくれているように感じた。

「……ユウイ。あなたは？」

「私は……」

陽ざしの中でのぼりぼりの頭を搔きながら少女が笑う。他の子供たちも、少女にあきれた様子を見せながらも自分達の名前を言った。ユウイはぺこりと頭を下げる、再び歩き始める子供たちの輪の中に入り歩き始めた。

嬉しくて嬉しくて、涙がこぼれそうになるのを必死で堪えながら。

+

「で、リアナ、カルテ、ギガ、ペテロ、ミストと友達になりました、と？」

カルペディエームのレジの前で、ヨーダが頬杖をつきながら、トレーニングサンドウイッチを乗せ得意げな表情で差し出すユウイに言った。「あの方、なんかおもいつきり名前間違えてませんか？ お前」ヨーダが片手で頬杖をついたまま、片手でめんどくさそうにレジを打っている。ユウイはサンドウイッチを受け取ると、得意げな顔のまま店の奥のテーブルに向かい椅子に座った。「なんだ、食べていいのか……」と、ヨーダが迷惑そうな顔をしながら店の裏に入つていいく。おそらく紅茶を淹れにいったのだろうなとユウイは思った。しばらくすると、ティー・ポットとカップを持つてヨーダが戻ってきた。はあ……とため息をつきながら、ヨーダが紅茶を注ぐ。ユウイはサンドウイッチを頬張りながら「ちよつと、さつきからしつれいだわ！」とヨーダに抗議した。

「失礼なのは生まれつきです。そんなことより、お前、俺の言ったこと理解してなかつたの？ 俺、街の子供と友達になつてこいつて

言つたか？」

ヨーダが心底呆れたような顔をしながら、コウイのおでこを指で弾いた。コウイはおでこを押さえながら紅茶を一口飲み、唇を尖らせた。確かに、ヨーダは七人の主の孫と友達になつてこいと言つた。そうすればカナタと友達になつてもいいと。

「ほんとうに、それでいいのかなつて、ずっとおもつっていたの」「何？」

レジに戻ろうとしていたヨーダが振り向く。コウイは紅茶のカップを見つめながら続けた。

「カナタとおともだちになりたいとおもつたのは、ほんとよ。いまだつて、そうおもつてゐる。ただ、なんていうか、みないふりしてたのも、ほんとなの」

言いたいことが上手く言えなくて、コウイは眉間に皺をよせた。そう。カナタと友達になりたかったのは本当。けれど、それを理由にして、身近な街の子供たちと仲良くしようと考えなかつたのも本当のこと。カナタはそれに気づいていた。それがコウイにとつて良いことではないことも。願い羽根に、カレイドスコープに託された想いはきつとそういうことなのだ。

顔を上げると、いつの間にかテーブルを挟んだ向こうにヨーダが腕を組み座つていた。コウイが口を開こうとすると、ヨーダはコウイの口に人差し指を当て、言つた。

「いい。ただ一つ大事なこと忘れてる。マーガレットのことだけどマーガレット、と聞いて、コウイの心臓がどきりと跳ねた。マーガレットとは相変わらず口も利いていない。コウイは紅茶のカップを置き、俯いた。

「俺とお前が一緒に帰つた次の日、マーガレットが仕事前に俺に所に来た。お前の事、よろしくお願ひしますつて、頭下げて言つたよ。その次の日も、その次の日も」

「今日もね」。ヨーダがコウイの口に当てていた指を外した。コウイが顔を上げると、ヨーダがコウイのおでこを思い切り弾いた。

「一三三日マー・ガレットの様子がおかしいから、どうせお前と喧嘩でもしたんだろうと思つたけど、お前が考へてるよりずっと、マー・ガレットはお前を心配してんじゃないの？」の軽い頭じゃ、わからぬかもしれないけれど……」

「また見ないふりする気？」。再び腕を組むヨーダが、おでこを両手で押さえるユウイに言つた。弾かれたおでこよりも、胸の方が痛い。そんな気がした。

「もやもやするわ」

「……そのもやもや、どうすればいいのか、もうわかつてんんだろ」ユウイはおでこを押さえ、思い切り鼻をすすつた。そうして大きく頷くと、えへへ、ヒヨーダに笑つた。

ユウイが椅子から降りると、店内にベルの音が響き、カルペディエムの扉が開いた。ぼさぼさ頭の少女が、申し訳なさそうにこちらを覗き込み、扉を閉める。ガラス越しに外を見ると、他の四人もこちらを見ていた。

「お友達がお待ちのようですよ、渢垂れお嬢さん」

ヨーダが立ち上がり、ユウイの使つていた紅茶のカップを持つて店の裏に下がつていつた。ユウイが店を出る支度をしていて、店の裏に続く入口のカーテン越しにヨーダがユウイを呼んだ。

「忘れてたけど、どうすんの？ まだ勝負を続けますか？」

カーテンから顔を出し、ヨーダがユウイに問つた。ユウイの答えは決まつていた。

「つづけるに、きまつてるのよ。あるじのまじだけじゃなくて、このまちのこども、ぜんいんともだちにしてきてあげるんだから」「そう言つとユウイはヨーダに向かつて思いつきり舌を出した。それに応えて、ヨーダが追い払つように手を振つた。

「ねえユウイ、あの人と話して平氣なの？ 怖くないの？」
ユウイがカルペディエムを出ると、開口一番にぼさぼさ頭の少女、カルテが言つた。他の四人も不思議そうにユウイを見ている。ユウ

イは一瞬何を言われているのか分からなかつたが、すぐにヨーダの事を言つてゐるのだろうと思い、カルテに問う。

「こわいって、なぜ？ なにかこわくなること、されたの？」

カルテは頬をほりほりと搔いて、空を見上げた。それからユウイに視線を戻すと、真顔で言つた。

「ない。なにもないわ。だつて、話したことさえないもの」

「……じゃあ、なんで、こわいの？」

ユウイが首を傾げてカルテに問うと、カルテは苦笑いをしてユウイを見た。

「考えてみたら、おかしな話だね」

「おかしいわ。とても、おかしいとおもうの」

「でもね、お母さんもお父さんもあの人、怖いって言つてる。なんか、心の内、全部見透かされてるような気がするんだつて。あの人、瞳の色が普通じゃないじゃん。だから余計にさ……みんな、隠したいことのひとつやふたつ、あるじゃない？」

そう言つと、カルテは自分の胸に手を当て「私なんか、ひとつやふたつじやたりないけどねー」と嘆いた。そんなカルテを見て、みんなが笑う。

「でも、興味があるのよ。私も今度、カルペディエムでお昼買おうかなー」

そう呟くように言いながら、カルテが歩き出す。「今田は何して遊ぼうか？」とカルテがみんなに問うと、皆口々に何をして遊びたいかを言つた。缶蹴りと鬼ごっこには飽きた、とか、リアナはまだどうがしたいと言つたし、大柄少年ギガは「そんなことより戦おうぜ！ 戦争！」と何やら物騒なことを言つて棒を振り回しカルテに小突かれていた。ペテロとミストはトランプがいいと一人で盛り上がりつてゐる。

ユウイはそんな四人の後ろを歩きながら、遊ぶことよりもママにどうやつて謝るうかしらと考えていた。謝るなら、早いほうがいい。ユウイは今日きちんと謝ろうと決め、少し前を歩く四人に追いつく

うと早足で歩き始めた。

「きやあ！」と叫ぶ声がした。リアナの声だった。他の四人も立ち止まって何か騒いでいる。ユウイは何があつたのか確かめるためにみんなの元へ走り出した。

ユウイがみんなの元に辿り着くと、リアナが地面に座り込み泣いていた。どうやら転んだようだつた。転んだ時に両手をついたのか、手のひらをすりむいでいる。大丈夫？　とユウイが声を掛けようとしたのを遮るように、幼い声が飛んできた。

「邪魔よ！　そんなところにぼさつと突つ立つていで！　ほんと愚図な子たちね！」

声のした方を見やると、大通りに馬車が止まつていた。どうやらリアナは馬車を避け転んだらしい。そこから自分よりも幼い少女が顔を出し、こちらに叫んでいる。ユウイはこの街で馬車を見たのは初めてだつたので、一体誰が乗つているのか分からず目を凝らして馬車を見た。

「キャロルじやん……やばいよなあ？」

ユウイの横で、ギガが呟く。みんながその場で凍りついたように立ち竦む中、ユウイはキャロルといつ名前をどこかで聞いたわと思ひ、思考を巡らせた。

「あ！　七人の主の孫だわ！」ユウイがキャロルといつ名前を思い出したのと同時に、カルテが馬車に向かつて走り出した。それをギガが止め、リアナが「いいのよ！」と叫んだ。すると馬車から幼い少女が降りてきて、金色の縦巻きロールを揺らし、蔑むような目をしてカルテの前に立つた。

「何よ。さつさと謝つてくださるかしら？　わざわざ降りてきてさしあげたのよ？　まさか私に逆らつような真似するために走つてきたんわけじやあないわよねえ？」

幼い少女が、カルテの髪を掴み、自分の足元に向かつて引っ張つた。こんなこと、こんな小さい子供がするなんて。ユウイは驚き、とつたにカルテの髪を引っ張るキャロルの腕を掴んだ。

「何するの。放しなさい。あなた、私を誰だと思っているの？ おじいちゃんにこの街から追い出してもらうわよ？」

「しらないわ、そんなこと！ それよりカルテの髪をはなして！」

知らないはずなんてない。 キヤロルは、七の主の孫。友達になれとヨーダに言われたあの七人の孫だ。その祖父は七人の主。マーがレットが関わるとめんどくさいことになると言つていた、あの。けれどユウイはキヤロルの腕を放さなかつた。なんだかとつても厄介なことになりそうなのは理解できた。それに、キヤロルとは友達になんて到底なれない、なりたくない子だということも。

「いい加減になさい！」 キヤロルがもう片方の手でユウイの頬を叩いた。ユウイがよろけて尻餅をつくと、キヤロルはカルテの頭を地面に擦り付けた。「謝れって言つてるのよー！」 カルテは何も言わずただ地面に顔を擦り付けていた。こんな小さな子、カルテなら振り払うなんて簡単なはずだろうに。ユウイは他の四人を振り返る。皆呆然と立ちすくんでいた。

「ごめんな、さい……」

カルテが地面に顔を伏せたまま、消え入るような声で言つた。ふん、とキヤロルがカルテの髪を乱暴に放す。

「口のきき方がなつてないけど、いいわ。許してあげます。あなたたち、誰のおかげでこの街に住んでられるのか、よく考えるのね」

「あら、あなた幾分かましな顔になつたわよ？」 埃まみれのカルテの顔を見て、キヤロルが笑う。ユウイの中で、何かが弾けた。ぱん、という軽い音が、周囲に響いた。手のひらが熱い。気が付くとユウイはキヤロルの頬をひつぱたいていた。「ユウイ！」 カルテがユウイの服を引っ張り、止める。

「……やつてくれたわね！！ あなた、ただじやおかないわ！！」

キヤロルが頬を押さえながら、ユウイを睨み付ける。子供の目じやないわ。ユウイは背筋が凍るような感覚を覚えたが、負けじとキヤロルを睨み付けた。

「……誰がただじやおかないって？」

殺伐とした空氣を割るよう、涼やかな声がした。振り向くと、店のエプロンをつけたままのヨーダが腕を組み立っていた。

「誰かと思えば、七番目じゃない。邪魔しないで頂戴」

「何イライラしてんのか知らないけどさ、お前の声が煩くて、うち

の店まで金切り声が響いてんだよ。このままだと営業妨害だ」

「七番目のくせに、私に意見する気？ あなたは庶民出の半端者。私に指図なんしたらどうなるかわかつてんの？」

「庶民出の半端者だからこそ、尙更どうでもいいんだよ。お前たちの貴族じつこやら階級じつこが」

ヨーダはユウイの前に立つと、キヤロルを見下ろした。一步引いて、キヤロルがヨーダを睨み付ける。脣が震えていた。

「庶民は庶民の味方つてこと！ いいわ！ けれどその目が気に入らないのよー 薄汚いアルト民族とやらの汚らわしい瞳がね！」

キヤロルはそう叫ぶと「潰してやるわ！」と両腕を前に差出した。その両手に稻妻のようなものが走る。カルテが叫んだ。

稻妻の中から、ユウイ達に向かって銀色のピックが放射状に飛んでくる。危ない！ ユウイはヨーダの服を掴んだ。目の前が赤い光に包まれる。ユウイは固く目を閉じた。

木々のざわめく音がする。突如突風が吹き荒れた。しん……と、静寂に包まれた大通りの風景の中で、ユウイが目を開けると、足元に銀色のピックが数本落ちていた。

「どういふこと……」

ユウイが何事もなかつたかのように腕を組んで立つヨーダの陰からキヤロルを覗き込むと、キヤロルの青ざめた表情が目に入った。キヤロルの視線はヨーダではなく、自分でもなかつた？。

「七番目じや、いけない？」

後方から、幼い子供の声がした。ヨーダが腕を組むのをやめ、振り向く。ヨーダの表情が明らかに変わった。蒼い瞳が揺らいだように見えた。ユウイはゆっくりと振り向き、声の正体を見止めた。

後方にある路地の前に、自分とそう年端の変わらぬ、ボブヘア一

の少女が立っていた。周囲の空気が今までと明らかに違つ。真冬のように冷たい空気がそこに流れていった。

「キャロル、下がりなさい」

馬車の中から、静かな老人の声が聞こえた。「なんだ、禿ジジイ、いたんじやないか」ヨーダが舌打ちをする。キャロルは「おじいちゃん……」と消え入るような声で言い、震えながら馬車に向かって歩き始めた。

馬車がキャロルを乗せ、走り始める。何事もなかつたかのように風が吹き、空気が変わる。ユウイはするするとその場にへたり込んだ。その横で、カルテが横たわっている。ヨーダがカルテに声を掛けても反応はなかつた。

「氣絶してるだけだる。田が覚めたら俺が送つてくる。他のガキどもは無事逃げたみたいだぞ」

他のガキども、と聞いて、ユウイは周囲を見渡した。リアナ、ギガ、ペテロ、ミストの姿はどこにもない。よかつたような、さみしいような、複雑な気分になつた。

「おそれくお前、明日からまた一人ぼっちだぞ」

カルテを抱きかかえると、ヨーダは路地の前に田をやつた。ボブ

ヘアーの小さな少女が無表情でそこに立つている。

「……おねえちゃん、おもしろいね。いつしょに、あそんでくれる？」

少女はユウイの前まで歩くと、ほんの少しだけ首を傾げた。ユウイはどうしたらいいのか分からずヨーダを見た。カルテを抱えたヨーダは、唇を噛みしめ、少女を見ていた。

+

呼吸が弾んでいる。胸がドキドキして今にも心臓が弾けてしまい

そうだった。

先に帰れ。そつヨーダに言われて、ユウイはカルテをヨーダに預け、ボブヘアーの少女を置いて家路についた。

玄関の扉を開くと、家中は薄暗かった。時計を見ると十四時を回つたところだった。マーガレットが帰つてくるのは、いつも十八時頃だ。ユウイは台所に行き水を飲むと、その場にへたり込んだ。ユウイは自分の右手を見た。この手でキャロルをひっぱたいた。人を叩くなんて初めてのことだった。相手は主の孫だ。大変な事をしてしまったに違いない。

叩いたこともそうだが、ユウイはキャロルがヨーダに向けて放つた銀のピックの事が気になつた。放たれる瞬間、キャロルの両手に稻妻が走るのを見た。赤い閃光も見た。一体あれは何？ まるで魔法じゃないか。

それからあのボブヘアーの小さな少女。あの少女は一体何者だろう。あの少女の姿を見たキャロルの怯えた瞳、いつも飄々としているヨーダの表情も変わつた。あの場所だけ真冬のように凍りついた空気が流れていた。

がちやり、と扉の開く音がして、ユウイは飛び上がるよつに振り向いた。薄暗い台所に明かりが灯る。扉の前にいたのはマーガレットだった。

「とんでもないことをやつてくれたわね」

腕を組み仁王立ちしているマーガレットに、ユウイは「じめんなさい……」と蚊の鳴くよくな声で謝つた。こんな風に謝るつもりなんてなかつたのに。もつとちゃんと、嫌いって言つたこと、謝るつもりだったのに。ユウイは自分が何で謝つているのか分からなくなりそうだった。

マーガレットはため息をつくと「まあいいわ」と手に持つていた荷物を床に置いた。ユウイはもつとひどく叱られると思っていたので、拍子抜けした顔でマーガレットを見た。

「やつてしまつたことは仕方ない。街の人たちに何があつたか聞い

たわ。でも、殴られたからって殴つていいわけでもない。相手が悪くとも、暴力は駄目よ」

「はい……」ユウイはそう返事をすると、首を傾げた。街の人から聞いた、つて、あの場所に街の人なんていかしら。なんだか不自然なほど人気がなかつたような気がするのに。ユウイがマーガレットにそのことを伝えると、苦笑いして言った。

「みんな近くの建物に逃げ込んで、中から様子を伺つていたんだつて。助けてくれてもいいのにね」

ええ？ ユウイはがつくりと肩を落とした。マーガレットの言うとおりだ。誰か一人くらい助けてくれたつていいじゃないか。もしかすると、この街で一番一番怖いのは七の主なんかじゃなくて、平気で子供を見捨てる街の人達ではないだろうか？

「みんな、面倒くさいことはご免なのね。気持ちはわかるけど、なんだかがっかりしちゃつたわ」

マーガレットはそう言つと、腕を捲り台所に立つた。

「下ごしらえして、お夕飯は、一緒に食べましょう。これから的事情はゆづくじ考えればいいわ」

野菜籠の中から玉ねぎを取り出して、マーガレットがユウイに手渡した。ユウイはそれを受け取ると、無言で皮をむき始めた。今日あつたこと、どこまでママは知つていて、私はどこまで話せばいいのだろう。

「……言いたくないことは言わなくともいいわ。でも、時期が来たら、ちゃんとママにも話してね。ママも、パパのことちゃんと話すから、もう少し時間を頂戴」

ユウイは玉ねぎを剥きながら、じくりと頷いた。そうして剥き終わつた玉ねぎをマーガレットに渡すと、ごめんなさいと大きな声で謝つた。

変化は次の日から始まつた。朝ユウイがマーガレットを見送り、身支度をすませ外に出ると杖つくおじいさんがのんびり歩いていた。

おはようございます、とユウイがあいさつすると、杖つくおじいさんは無言のままユウイの前を通り過ぎていった。耳が遠いのかしら？ ユウイは特に気にすることなく家を後にした。

今日はまず、カルテの家に行こう。ユウイは噴水広場の先にあるカルテの家へと向かつた。昨夜は自分がこれからどうなるかということよりも、カルテのことが気になつた。ヨーダはちゃんとカルテを送つてくれたのかしら。カルテはちゃんと目を覚ましただろうか。早足で噴水広場を抜け、住宅街に入つていく。途中何人もの人とすれ違つたが、ユウイがあいさつをしても誰も返事を返さなかつた。ユウイの表情が不安で強張つていく。まさか、と思った。これは、街の人々に、無視をされているのではないだろうか？

不安な気持ちを振り払つように、駆け足でカルテの家の前まで来ると、ユウイは玄関の扉を叩いた。はい、と中から声がして、ユウイはほつと息をついた。

軋む音を立てながら、扉が開くと、中からぼさぼさ頭の中年女性が顔を出した。カルテのお母さんかしら？ ユウイがおはようございます、とあいさつすると、それとほぼ同時に扉が音を立てて勢いよく閉まつた。

ユウイがあつけにとられて立ち竦んでいると、いくつかの視線を感じた。辺りを見渡すと、住宅街の人々がさつと家の中に入つていつた。まるで何か悪いものから身を隠すように。

ユウイは急ぎ足で同じ住宅街に住むギガとペテロの家へと向かつた。ギガの家の前につくと、家の外で草むしりをしていたおばさんが、ユウイの顔を見るなりそそくさと家の中に入つて行つてしまつた。家の扉を叩いても、中から誰も出でることはなかつた。ペテロの家は、カルテと全く同じ反応だつた。

とぼとぼと、ユウイは住宅街を後にする。噴水広場に辿り着くと、噴水前のベンチに座り大きなため息をついた。

街の人々が、自分を無視している。どうして？

そうか、昨日の事か。ユウイは空を仰いだ。こんなにいいお天氣

なのに、噴水広場には誰もいない。コウイはもう一度大きくなため息をついた。街の人たちに無視されるのは気分のいいものではなかつたが、何故だか思ったよりダメージのない自分がいた。この街の人たちは、おかしい。七の主より、ずっとずっとおかしいわ。コウイは頬を膨らませ唇を尖らせた。お腹を好かせた鳩だけが、餌を求めてコウイの周りに集まっていた。

「……おねえちゃん、ひとり、なの？」

噴水広場の鳩たちが、一斉に飛び立つた。振り向くと、昨日のボブヘアの少女が立っている。コウイは気配無く自分に近づいた少女に驚き、同時に警戒した。

「おねえちゃん、ひとりなのね。わたしといっしょね」

少女は無表情でそういうと、指で地面に絵を描き始めた。髪の跳ねた男の子のようだつた。

「……おえかき、すきなの？」

コウイが恐る恐るそう尋ねると、少女はほんの少しだけ笑い、男の子の絵を完成させた。そしてなぜか少女は地面を右足で踏み鳴らすと、下を向き小さくため息をついた。

「そのこは、だあれ？　おともだち？」

コウイが少女に尋ねる。少女は「わからない」と言い、コウイの顔を見た。

「おねえちゃん、なにがすき？　わたしが、かいてあげる」

少女はまた小さく笑い、しゃがみこんだ。コウイはベンチからするりと降りて少女の横に並ぶ。この子、怖くないわ。コウイは昨日の凍りつくようなあの感じはなんだったのかしらと首を傾げた。今自分の横でしゃがみこむ少女は、自分と変わらぬ普通の少女だ。

くません。コウイがそういうと、少女は嬉しそうに地面にくまの絵を描き始めた。上手ね。コウイがそうほめると、少女は立ち上がりまた右足で地面を踏み鳴らした。

もくもく、とくまの絵を中心に、周囲に煙が広がった。コウイが驚き尻餅をつくと、消えていく煙の中からぽんと何かが飛び出し、

地面に転がった。

少女がそれを拾い上げ、ユウイの前に差し出した。ちこさなくまのぬいぐるみだった。

「これ、おねえちゃんにあげる」

ユウイはそのくまのぬいぐるみを受け取ると、無表情のまま立ち去ろうとする少女に言った。

「まつて！ あなた、いったい、だあれ？」

少女が振り向く。

「モモ」

そういうと、少女は大通りに向かって歩き始めた。ユウイは大きく深呼吸すると、くまのぬいぐるみを握りしめ、意を決し少女を追いかけた。

+

夕暮れが孤立した街と、孤立した自分を照らしている。ユウイはとぼとぼと大通りを歩き、カルペディエムを目指した。

カルペディエムの店の前でヨーダが掃き掃除をしている。ユウイが声を掛けようとする前に、ヨーダはこちらに気付いたようだつた。

「話があるんだろ。入れ」

ヨーダはそう言つと店の扉を指差した。ユウイは言われた通り店に入ると、奥のテーブル席に着いた。

掃き掃除を終えたヨーダが店の中に入つてくると、ユウイは堰を切つたように話し始めた。昨日送つていった後のカルテの様子はどうだったのか、街の人たちの様子が変わつてしまつた。昨日のことが原因？ ママは大丈夫なのかしら？ 心配なことが沢山ある。「まずカルテの事だけど、昨日あの後ちゃんと目を覚まして、俺が家まで送つたよ。ごめんねって、お前に謝つてた」

コウイはほつと息をついた。カルテはちゃんと目を覚ました。それを聞いただけで大分胸が軽くなつた。

「昨日の事、お咎めなしつて昨日キヨリカで聞いたけど。お前の事無視してんのは街の奴らが勝手にやつてることだから、わかんねーよ。マーガレットは無視されてないし、たぶん自分たちは関係ないつていうアピールだらうな」

お咎めなし？　コウイはヨーダに訊き返した。そう、お咎めなし。ヨーダが笑う。

「運がいいな。普通だつたら街から追い出されてるのに」

「でも、なんで？　なんでおどがめなしなの？」

なんだ、お咎めありの方がいいのか？　ヨーダが意地悪そうに笑う。コウイはぶんぶんと大きく首を横に振つた。

「色々と、事情があるみたいでさ。まあいいんじやない？　追い出されなくて済んだんだから」

「……もしかして、きのうの、おんなのこがかんけいあるの？」

コウイがそう問うと、少し間をおいてヨーダが首を横に振つた。昨日のあの空氣は、普通じゃなかつた。コウイが再び口を開こうとすると、遮るようにヨーダが言つた。

「昨日の奴の事は忘れる。それより、お前、結局七の主の孫と友達にはなれたのか？　今日まだ六日目だけど」

七の主の孫？　友達？　一瞬なんのことを言われてるのか分からずコウイは首を傾げ、ああ！　と大きな声で叫び頭を抱えた。忘れてたのか……。ヨーダが呆れたように笑つた。

「まつて、あと一日で、なんとかするわ！　なんとか……」

「無理だろうな。昨日の事、他の孫も知つてるし。あいつら仲良しだから、お前が来たつて相手になんかしてくれないよ」

まず門番が許可証持つていても通さないよ。ヨーダはコウイの鼻を人差し指で突いた。コウイは鼻の頭を押さえ、あと一日で主の孫と友達になる方法を考えた。けれど頭がのぼせて何も思い浮かばなかつた。

「あと一日残して詰んだな。」そのままゲームオーバーか

「まつて、あと一日あるわ！ キょうだつて、おともだちになつてくれたこ、いるんだから、あるじのまじだつて、あつと……」

「今日友達に……つて、一体誰だよ？」

ヨーダが驚いた様子でコウイを見た。コウイは腰に手を当て、続けた。

「モモちゃん」

その名前を出した瞬間、ヨーダの表情が険しくなった。

「モモつて……モモ・オフワールの事か？」

コウイが頷くと、ヨーダは深いため息をついた。なんでお前はそ

う……。呟くようにヨーダが言った。
「あの、モモちゃんがね、おえかきして、足をふみならすと、かい
たものが出てくるの。あれはなに？ まほう？ きのうのキャラロ
ルのピックも、あれはなに？」

コウイが興奮気味にそう問うと、ヨーダはまたため息をついた。
しばらく考える仕草をして、ヨーダは答えた。

「魔法とは、違うと思う、たぶん。それよりお前は……昨日のモモ
を見て怖くなかったのか？」

ヨーダにしては、歯切れの悪い答えた。コウイは昨日のモモ
の様子を思い出し、今日のモモを思い出して、考えた。確かに昨日
のモモは怖い、と思つた。けれど今日のモモはちよつと無表情だけ
ど普通の女の子に見えた。どっちが本当のモモちゃんだらう？
「こわいけど、こわくないの……」

「意味がわかりません。もうこにやどりでも」

ヨーダはそういうと、店の裏に入つていつた。取り残されたコウ
イは明日一日で主の孫と友達になるにはどうしたらいいかを必死に
考えた。

頭から湯気が出そうなほど考えていると、ヨーダが店の裏

から戻ってきた。手には数冊の本を抱えて。

「カナタから、お前に。約束だからな、一応」

そういうと、ヨーダはコウイに本を渡した。どこかで見たことのある本だわ……。コウイは首を傾げ、ああ！と叫んだ。

「塔にいったときに、カナタがわたそうとした本ね！」

ヨーダが頷く。コウイは一番上の本の表紙のタイトルを見た。見たことのない文字で書かれている。コウイは本をめぐり、中の挿絵を見てあつと声を上げた。

「手で、おはなしする本ね！でも、どうじ……」

「勝負はお前の勝ち、つてこと。塔への行き方を教えてやる。その代わり今後モモと会うな」

どうして！コウイはヨーダの言葉に声を荒げた。いふせー、とヨーダが険しい顔で言つた。

「いいだろ、当初の目的は果たせたんだ。勝負はお前の勝ち。カナタにまた会える。それでいいじゃないか

「よくないわ！ そんなの、おかしいもの！」

そもそも何で私の勝ちなの？ ヨーダに問うても、ヨーダは答えなかつた。

「おかしいわ……ともだちつて、だれかに駄目つていわれたら、なつちやいけないものなの？」

「そういうことは、自分で責任が取れるようになつたら言つてくれ。どうするんだ？」

カナタを取るか、モモを取るか。ヨーダは険しい顔のままコウイに問うた。コウイはどうしていいかわからず、目にいっぱい涙をため込んで、ヨーダを見ることがしかできなかつた。

「こんな小さな子をいじめて、ほんとにお前は悪ガキだのう」店の裏から声がして、ヨーダが声のした方を振り向いた。コウイもそちらを見やると、白ひげを撫で付けながらコルトが顔を出した。「なんだよジジ。口出しすんな

「おお、こわいこわい。こわくて禿げあがつてしまつたわ。このまでは冬が越せん」

禿は元からだろ。ヨーダが突つ込むと、コルトは「ほうれ意地悪

じや。また禿げた」と自分の頭を撫でた。どうでもいい。ヨーダは心底どうでもよさそうに言つた。

「おじょうちゃんは、一人とも、友達だと思つとるんじや。一人とも友達でいいじやないか」

「ふざけんなジジ、それがどういうことかわかつてんのかよ」

ヨーダがコルトを睨み付けた。コルトはそんなヨーダの頭をぐりぐりと撫で、言つた。

「なにがあつたら、すぐ逃げなさい。そしてすぐわしに報告すること。それを条件にしよう。いいかね?」

コルトはヨーダに振り払われた手で、今度はユウイの頭を撫でた。何かあつたらすぐ逃げる。何かつてなんだろう。そう疑問に思つも、ユウイはコルトに大きく頷いた。

「勝手に決めんな。ジジ、あんた」

「責任はわしが取るよ。ちいとばかし、様子を見てみんかの?」

お前は余裕があるようで余裕のない奴じやの。コルトがそういうと、ヨーダは着けていたエプロンを外しレジの上にまおつて店の裏に入つていつてしまつた。怒つてしまつたのだろうか。ユウイがヨーダを呼びとめても、返事がなかつた。

「のうおじょうちゃん。もうひとつ約束しておくれ。カナタの前で、モモの話はしないでくれんかの?」

どうして? ユウイがコルトに問うと、コルトは真剣な顔になり、ユウイに言つた。

「そうじやのう……一人は、ほんの少うし仲が悪いといつかの、喧嘩をしておるんじや。ちいとばかし拗れておる。これは二人の問題じやからのう、仲直りが済むまで、ほつておいてやつてくれるかの?」

「そうか、喧嘩か。ユウイは「わかつたわ」とコルトに頷いた。すると店の奥からヨーダが現れ、ユウイに紙を一枚手渡した。その紙には、街の路地裏の地図と、その上に一筆書きの蝶の絵が重なるようになっていた。

「その方法でしか、路地裏は抜けられない。後は自分で考える。街の奴らは総スパイだから、くれぐれも見つからないように気を付けるんだな」

ヨーダはそれだけ言つと、また店の奥に引っ込んでしまった。ユウイは「ありがとう」ともう姿の見えないヨーダに言つた。

「よかつたのう。カナタもきっと楽しみにしとるよ。お前さんが遊びに来てくれることを」

コルトはそういうと、ユウイの頭を撫でた。ユウイはペコリと頭を下げると、すっかり暗くなってしまった外を見て、慌てて店を出た。

店を出ると、ほんの少し世界が変わつて見えた。ようやくカナタに会えるんだ。

けれど、カナタとモモは仲が悪い。その言葉を思い出し、ユウイは肩を落とした。

きっと、カナタなら、誰か一人でも友達が出来たと伝えたなら喜んでくれたに違いないのに。預かりっぱなしの願い羽根に、一体何を届けてもらおう。

それに、何故急にヨーダはカナタと友達になることを許可したのだろう？ 考えることは山ほどあった。

薄暗い大通りを歩いていると、ペテロとギガの一人が歩いているのを見かけた。二人はユウイの姿を見つけると、一団散に逃げ出した。ユウイはそれを追いかける。街の人々はユウイの姿を見ると隠れてしまう。それは変わらない。

これから先何があるかなんてわからないけれど、絶対に、諦めて後悔することだけは嫌だわ。明日はまたカルテの家に行こう。何度も目の前で扉を閉められても。

煌めき始まつた星空の下、ユウイは全力で走つた。掴めないものなんて、きっとない。ヨーダから受け取つた地図を握りしめながら、いつかきっとこの星空さえ、掴めそうな気がした。

s
t
r
a
y

c
r
y

b
a
b
y

·
0
1

·
·
·

e
n
d
·

「」意見、「」感想はお気軽にどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9212z/>

†路地裏の風使い† stray cry baby.

2011年12月28日21時58分発行